

小松市内遺跡発掘調査報告書 XVI

古府しのまち遺跡

小 松 城 跡

本 折 城 跡

2021 . 3

石川県小松市埋蔵文化財センター

例言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【古府しのまち遺跡（第4次）】（平成28年度）

【調査地】	石川県小松市古府町
【調査原因】	個人住宅建設
【試掘調査】	2016.9.23
【試掘担当】	岩本信一
【調査面積】	125m ²
【発掘調査】	2016.11.28～2017.1.9
【調査担当】	下濱貴子

【小松城跡（第8次）】（平成29年度）

【調査地】	石川県小松市丸内町
【調査原因】	個人住宅建設
【試掘調査】	2016.9.5
【試掘担当】	岩本信一
【調査面積】	70m ²
【調査期間】	2017.12.4～2017.12.22
【調査担当】	宮田 明

【本折城跡（第2次）】（平成30年度）

【調査地】	石川県小松市上本折町
【調査原因】	個人住宅建設
【試掘調査】	2017.12.22
【試掘担当】	岩本信一
【調査面積】	115m ²
【調査期間】	2018.4.10～2018.4.30
【調査担当】	横幕 真

4. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、令和2年度に実施した。
6. 遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、一部に田邊朋宏氏の協力を受け、ほかは各執筆担当者が行った。
7. 本書の執筆は各担当者を目次に付記し、編集は宮田が担当した。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、世界測地系（測地成果 2011）に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 高度は標高（T.P.）で表示している。
4. 本書に示す土色はマンセル色体系に準拠している。

目次

I 位置と環境	1
II 古府しのまち遺跡発掘調査	（下濱）13
III 小松城跡発掘調査	（宮田）25
IV 本折城跡発掘調査	（横幕）29
写真図版 1～8	
報告書抄録	

第I章 位置と環境

第1節 地理的環境

小松市の地形は、その形態や発達状況、面の連続性等により、東から山地（両白山地）、丘陵地（能美丘陵）、台地（八幡台地・月津台地・柴山台地）、低地（能美低地：後背湿地・自然堤防・沿岸州Ⅰ・沿岸州Ⅱ・沿岸州Ⅲ）、扇状地に区分することができる。これらの地形は、小松市周辺において北西-南東の圧縮を受けながら全体的に隆起している大地の上で、第四期半ば以降に繰り返されてきた地球規模での約10万年周期の温暖・寒冷の繰り返しによる気候変化（氷期-間氷期サイクル気候変化）、これに伴う海面変化の影響によって形成されたものである。

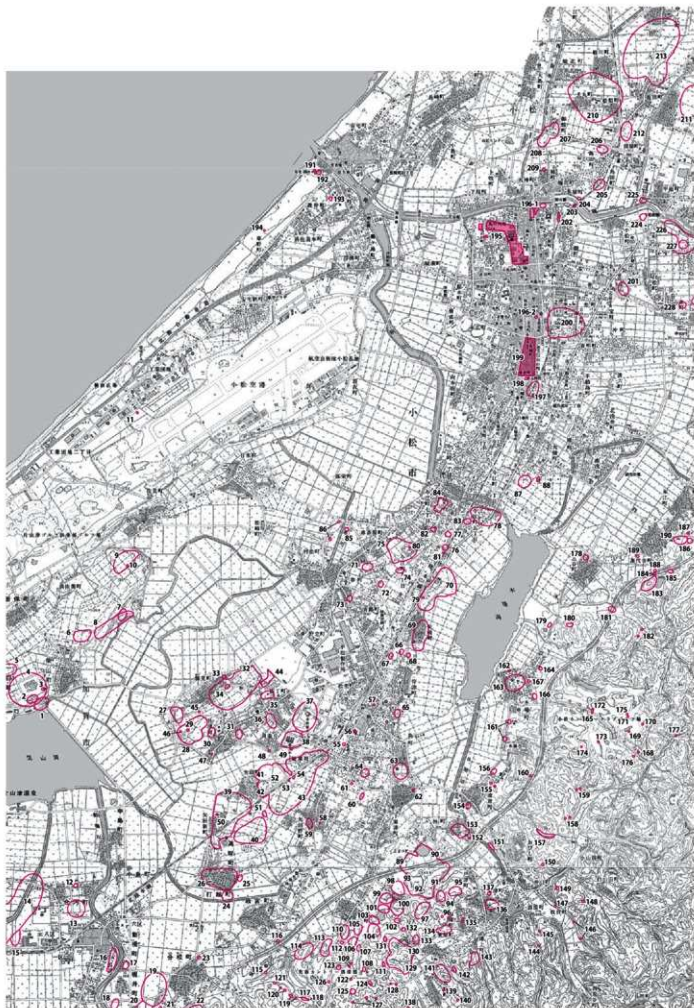
小松市における台地は、現在とほぼ同様の気候であったと推定されている最終間氷期、その中の約12万年前と10万年前に形成された海成段丘面からなっている。この当時には、現在の丘陵地の縁辺まで海域となっていたと考えられている。その後訪れる地球規模での寒冷化が進んだ最終氷期には、海面低下に伴う河川の下刻により、これらの台地は大きく掘り込まれ、月津台地と八幡台地や柴山台地の間には、谷地形が形成される。ボーリング試料の花粉分析により、当時の小松市の植生は、冷温帯上部～亜寒帯下部に相当する広葉樹と針葉樹の混交林が広がっていたことが推定された。最終氷期の終了後は、気候が温暖化し、海面が急激に上昇することにより、縄文海進の影響が小松市周辺にも及び、台地、丘陵地の縁辺まで海域が広がったと思われる。この際には、最終氷期に形成された谷地形も海底となった。縄文海進のピーク頃（約7,300年前）には、小松市周辺に存在した内湾は、水深が現在の梯川と前川合流部付近で約20m、今江潟付近で約17m、木場潟周辺では約6～7m程度であったと考えられる。これらの海域は、約7,000年前以降には、小松空港が立地する地形である沿岸州Ⅱが発達し、日本海から切り離されることとなり、潟湖（ラグーン）の原形がつくられる。能美低地は、沿岸州の内陸側に存在する水域が河川から供給された堆積物により埋積されたものであり、その際の埋め残された水域が海跡湖である加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）となっている。また、小松市市街地が位置する沿岸州Ⅰの形成は、少なくとも約7,000～5,300年前には終了している。



第1図 小松市の位置



第2図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代

最終氷期が11,700年前に終わり、後氷期の温暖化に伴って縄文海進と呼ばれる海面上昇が進行し、前期前葉にもっとも温暖化した時期を迎え、当時の海面は現在よりも2～3m高かったことが明らかにされている。旧石器後期～縄文草創期は晩氷期に、縄文早期は海進期に相当し、自然環境が安定した前期中葉～晩期においても地球規模での寒冷化を3度経ている。旧石器時代後期から縄文時代は自然環境が大きく変わる時代にあっており、環境変化に適応しながら人びとは狩猟・漁労・植物採集活動を主生業とし、生活を送ってきた。

小松市域においては、旧石器後期～縄文草創期の石器が東部丘陵の八里向山遺跡群(310～319)や月津台地の念仏林遺跡(37)・矢田野エジリ古墳(55)から出土しており、丘陵上が生活や狩猟活動の場となっていたことがうかがわれる。早期末～前期初頭には六橋遺跡(369)や柴山水底貝塚(1)で定住生活が始まり、前期前葉に最高の海水準に達し、海水面が安定した前期中葉から居住が再開されて木場潟を望む大谷山貝塚(156)が築かれた。前期を通じて沿岸州が発達し、木場潟・今江潟・柴山潟の加賀三湖の原形が形成された。中期前半には柴山潟を前面にした月津台地の念仏林南遺跡(38)・念仏林遺跡(37)で人びとが暮らし始め、中期後半からは大杉谷川・淳上川流域の河成段丘に生活の場を求めて移住している。さらには梯川・鍋谷川流域の能美低地でも集落が営まれていた。

2 弥生時代

八日市地方遺跡(200)が、本格的な稲作社会の指標となる環濠集落として成立するのは、弥生時代中期初頭、紀元前350年ごろのことである。西から日本海経由で榊土器を携えた人々と地元の条痕土器を使っていた人々が、協働でムラづくりを行った。環濠集落形成当初から、農具など稲作文化を支える諸道具が網羅的に生産され、計画的に新時代のムラづくりがおこなわれたことがわかる。集落内では、市の南部で産出する良質の碧玉を原料に管玉生産が大規模に行われ、日本海を通じた西の社会との交換財として流通した。東アジア最古となる柄付鉄製ツルギ錐の出土は、交換財の一つが最先端の鉄の道具であったことを物語っている。小松式土器が成立した集落の最盛期には、まさに東西文化の結節点の役割を果たした。近年、北陸新幹線建設に伴う園町遺跡(202)の発掘調査で、同時期の環濠集落が発見された。沿岸州上の至近距離で環濠集落が形成されていることは、拠点集落の機能を考える上で再検討を迫るものである。中期後葉(紀元前100年頃)に、西から凹線土器とよばれる新しい土器型式が波及しはじめると、八日市地方遺跡は急速に縮小から解体へと向かう。同時に小規模な集落が梯川やその支流へと分散したと考えられるが、遺跡数は低調である。

やがて弥生時代後期前半(紀元後100年頃)になると、木器生産が盛んに行われた白江梯川遺跡(226)や、北陸でも最古級の鉄鍛冶と銅鑄の鑄造関連資料が発見された一針B遺跡(231)など、ある程度ものづくりの中心的な役割を担った集落が登場しはじめる。後期後半には、梯川の中流域を中心に遺跡は拡散・急増し、流域は県内屈指の遺跡密集地となっていく。低地だけでなく、八幡遺跡(254)や吉竹遺跡(246)など、台地上でも遺跡が展開しはじめており、新たに加賀三湖に囲まれた月津台地でも、念仏林南遺跡(38)や額見町西遺跡(27)といった高台の集落も誕生している。

また、後期後半の一時期、低地との比高が20mを超えるような急峻な丘陵地で、短期的な集落が認められるようになる。いわゆる高地性集落と呼ばれ、古墳時代前夜の緊張状態を示すとも考えられているが、梯川流域の集落が全て高所に移動するわけではなく、平野部の遺跡が並存している。河田山遺跡(286)は、明らかに防御機能を備えた集落と考えられるが、一方、大型住居や倉庫群を伴いな

から、複数集落で構成される八里向山遺跡群(310～319)は、丘陵上に拠点的な役割を担う集落が存在したことを示している。これらの丘陵地では、古墳時代が幕を開けると同時に集落は終焉を迎え、台頭した首長たちによる古墳造営の舞台へと変わっていく。

3 古墳時代

古墳の造営主体の多くは、弥生時代以来の農業生産を基盤とした集団を統率する首長層であった。南加賀では、北の能美低地と南の江沼低地(加賀市域)といった二つの穀倉地帯が勢力基盤となり、それぞれの低地を望む丘陵地で古墳を築造した。こうして能美と江沼両地域の首長は、南北で拮抗する勢力圏を形成したのである。

能美地域の古墳群は、古墳総数が200基を越えるとされ、わけでも能美市の和田山・末寺山・秋常山など独立小丘上の古墳群は、北陸最大級の前方後円墳を擁して中核を成している。一方で、梯川を望む小松市東部丘陵地には総数60基を越える河田山古墳群(287)があり、地域支配の補完関係が目出される。能美低地中央に位置する千代・能美遺跡(234)では、前期の首長居館とされる遺構を検出しており、能美勢力の中核部を考える上で重要である。

中期の能美地域は、北陸有数の甲冑集中地域で知られる。埴田後山古墳群(283)や八里向山F古墳群(315)など、中・小規模の円墳を主体とする古墳群でも出土し、倭王権との軍事的関係を契機とした新興勢力の台頭が想定される。

後期になると、これまで古墳の空白地帯であった加賀三湖に囲まれた三湖台地域(月津台地)で、突如として小型前方後円墳を中心とする多数の古墳群が誕生する。大量の人物埴輪が出土した矢田野エジリ古墳(55)が著名であるが、その勢力基盤については謎が多い。この頃、台地に連なる丘陵地で須恵器生産が始まり、さらに越前から継体天皇が擁立されるなど、手工業生産や加賀三湖の水運を意識した勢力構図の再編が進行したようだ。

終末期の南加賀では、墳丘を持つ群集墳の形成がほぼ終息し、加賀市法皇山のような横穴古墳群のみが継続する。そして、中央氏族の関与が想定される特定階級の墳墓として、河田山の切石積横穴式石室の築造、最後は横穴式石櫛を持つ那谷金比羅山古墳の築造をもって古墳時代は幕を閉じる。

4 古代

南加賀地域には、能美地域古墳群の母体となる能美平野の集落遺跡群と江沼地域古墳群の母体となる江沼盆地の集落遺跡群とがあり、それが飛鳥時代以後も継続的に在地首長層の地盤として営まれ、継続的に集落経営がなされた。

沖積低地の伝統的な集落遺跡に対し、7世紀になって突如、月津台地に三湖台地集落遺跡群が面的な広がりをもって出現する。当遺跡群は、製鉄や製陶等の手工業生産に生業を置く集落であり、堅穴建物跡付設の竈形態や出土する移民系土師器の形態から、朝鮮系移民を軸とする政治的移配の移民集落群と位置づけた。

三湖台地集落遺跡群の渦を挟んだ東側丘陵には、7世紀以降に生産を活性化させる南加賀製陶遺跡群と当期に砂鉄製錬を開始する南加賀製鉄遺跡群が広く分布する。製陶遺跡群は5世紀末から操業を始めるが、7世紀に新たな技術を取り入れ生産拡大しており、7世紀後半から8世紀へと製鉄もあわせて更なる生産拡大を図る。製陶は10世紀中頃まで、製鉄は12世紀まで連綿と操業する北陸最大規模の古代手工業生産地帯であり、三湖台地集落遺跡群を丘陵部製陶製鉄遺跡群の母体集落として一体的に経営されたと理解する。

5 中世

中世前期に区分される平安時代末から南北朝時代（12世紀中頃～14世紀中頃）、耕地が展開した低地では、地頭や武士などの在地領主をはじめとして、自作農の名主なども点在的な小集落を営み、耕地を見下ろす丘陵には、経塚や墳墓など祈りの場が設けられた。なかでも、佐々木ノテウラ遺跡(241)の区画溝と住宅は、得橋郷で敷設された中世条里の確認事例として注目できる。古府シマ遺跡(269)は、立地とその歴史的な環境、鎌倉期に盛行した集落規模に加えて、高級な中国製陶磁器なども潤沢に受容した生活様相から、加賀の国衙に深く関連した集落遺跡として評価できる。また宮の奥経塚(331)は、仏教的な作善として法華経などを埋納した里山の聖地で、鍋谷川中流の八里向山中世墓群(317)は、得橋郷の在庁「弥里介」の奥津城と一族の葬地とみられる。

中世後期の室町時代から戦国時代（14世紀末～16世紀後半）になると、白江荘周辺の在地領主は、屋形の一角に堀割の開削をおこない、付随した町場では下駄や曲物職人などの集住を進めた。また交通の要衝となる丘陵地では、戦時の城郭が整備され、波佐谷の台台には、本願寺一家楽寺院の拠点として土塁を構えた城郭寺院(367)が造営された。他方、街道が通過していた本折では、特産の絹織物で知られた町場が、幸町遺跡(197)の周辺にも広がって鍛冶職人の集住が見られた。さらに、中世後期の上土品を見ると、香炉や花瓶などの仏具、火鉢や行火の暖房具、茶の湯の広がりを見せる茶道具の茶壺・風呂・茶臼などの用具が新たに確認できる。これは日常の生活文化と嗜好性が、急速に広まったことを示している。

6 近世～現代

小松城(195)が史料に初めてみえるのは天正11年(1583)で、村上頼勝の在城が知られる。その後慶長3年(1598)に丹羽長重が入城し、慶長5年からは前田氏の所有となった。寛永16年(1639)、前田利常は隠居の地を小松に定め、城と城下の整備に着手している。いま遺構として確認できる小松城は前田時代のものであるとみられる。小松城の発掘調査は、大きな面積では小松高校改築に伴うものがある。同校は本丸、二の丸に位置を占めており、数次にわたる調査によって、本丸側石垣、二の丸石垣のほか結核を内部施設とする井戸群、掘立柱建物などを検出した。明治4年(1871)に始まった破却により遺構はほとんど残っていないとみられていた小松城であるが、石垣の基部や井戸が地中に残存することが各所で確認された。また、住宅建設等にもなる数か所の発掘調査で、三の丸や中土居の石垣や堀が確認された。このうち、市立博物館収蔵庫建設にもなる調査では、絵図にみえない石垣が検出され、小松城の構造を再検討する知見が得られた。

利常入城にもなる藩士移住により町割が決まった城下では、大川遺跡(196-1)ではじめて大規模な発掘調査が行われた。北国街道の両側に形成された泥町と呼ばれた城下の町屋敷で、街道に面して連なる「短冊形」の屋敷が発掘された。町屋敷のひとつから古九谷窯製品がまとまって出ており、焼物商の存在が想定されることとなった。柳川を渡った北国上街道は西に方向を変え泥町に向かう直線道となるが、ここでは街道および新町堀に架けられた梯小橋の橋台石垣を発掘した。街道は17世紀前半以降、数次にわたって路盤がかさ上げされており、路面には玉砂利が敷かれていた。小橋の橋台石垣は凝灰岩の切石を積んだもので、小松町の玄関口にふさわしい堅固な造りとなっている。

若杉窯(245)と八幡若杉窯(254)は能美部における再興九谷を代表する窯である。若杉窯は文化8年(1811)から磁器生産を開始し、文化13年に藩窯になり生産を拡大した。陶器を主体とし、染付、白磁、青磁、色絵などの焼成を行っていたが、天保7年(1836)、火災により機能を失った。同年、隣接する八幡村で開窯したのが八幡若杉窯で、ここから出た碗にある「天保七」の紀年銘は移転・開窯を裏付ける資料となっている。

引用文献

市史編集委員会 2020『新修小松市史』資料編17 考古より、第一章～第八章の概説の一部を抜粋掲載

第1表 遺跡地名表

No	名称	種別	時代	備考
1	柴山水坑貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中里墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城跡	中世	
5	一白A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
7	柴山水坑遺跡	貝塚	弥生	
8	柴山山村遺跡 (A地点)	集落跡	弥生	柴山山村遺跡A地点に所在する貝塚
	柴山山村遺跡 (B地点)	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山のノ遺跡	散布地	縄文	
10	色美群塚	群塚	不詳	
11	白木群塚	群塚	不詳	
12	合河遺跡	散布地	不詳	
13	駒橋遺跡	散布地	古代 (平安)	
14	稲穂遺跡	散布地	縄文	
15	稲穂A遺跡	集落跡	弥生～中世	
16	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
17	藤橋跡	橋跡	中世 (室町)	
18	観音堂センター遺跡	散布地	古代	
19	分枝A遺跡	散布地	古代	
20	分枝B遺跡	散布地	古代 (平安)	
21	分枝山王古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分枝カノ山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、方墳6
23	分枝高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越A遺跡	散布地	縄文	
25	打越B遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城跡	中世 (安土・織山)	
27	観見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山A遺跡	散布地	不詳	
29	茶臼山B遺跡	散布地	縄文	
30	茶臼山稲穂遺跡	その他の (祭祀)	古代 (奈良)	
31	川津オオ遺跡	散布地	古墳・中世	
32	川津A遺跡	散布地	古代 (奈良)	
33	川津B遺跡	散布地	縄文	
34	観見町遺跡	集落跡	古墳～中世	
35	観見神社前A遺跡	散布地	古墳	観見町遺跡の一部
36	観見神社前B遺跡	散布地	縄文	観見町遺跡の一部
37	中町遺跡	散布地	縄文・不詳	
38	川津新遺跡	散布地	縄文・古代	
39	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
40	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
41	矢田新遺跡	集落跡	古代 (奈良)	
42	刀何理遺跡	散布地	縄文	
43	刀何理遺跡	集落跡	古代～中世	
44	矢田A遺跡	散布地	縄文	
45	矢田B遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
46	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
47	白のはそ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
48	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
49	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
50	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
51	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
52	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
53	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、本志粘土室
54	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
55	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
56	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
57	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
58	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
59	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
60	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
61	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
62	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
63	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
64	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
65	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
66	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
67	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
68	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
69	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
70	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
71	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
72	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
73	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
74	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
75	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
76	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
77	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
78	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
79	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
80	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
81	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
82	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
83	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
84	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
85	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
86	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
87	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
88	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
89	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
90	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
91	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
92	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
93	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
94	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
95	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
96	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
97	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
98	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
99	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積
100	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積6式石室、家形石積

No	名称	種別	時代	備考
62	下栗津B 竪穴部	竪穴墓	不詳	竪穴2
63	池遺跡	集落跡	弥生～中世	
64	池B遺跡	散布地	古代	
65	池C遺跡	散布地	古墳	方墳?
66	丹津A遺跡	散布地	縄文	
67	丹津B遺跡	散布地	縄文	
68	丹津C遺跡	集落跡	古墳	
69	朱崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	泉跡遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	甲カンノヤマA遺跡	散布地	古代(奈良)	
72	甲カンノヤマB遺跡	散布地	古墳	
73	甲カンノヤマC遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土百遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	九郎地貝塚	貝塚	縄文	
79	朱崎B古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土百古墳	古墳	古墳	
82	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小形石積定史跡
83	今江竪穴部	竪穴墓	不詳	竪穴4
84	御幸塚遺跡	城跡跡	中世	土郭と曲輪の一部
85	甲古墳跡	牛産遺跡	中世末	製陶
86	日本丸古墳跡	牛産遺跡	奈良前期	横丸古
87	大瀬遺跡	集落跡	古代～中世	古代北評遺
88	浅井稲古戦場	その他の墓	中世末	群集定史跡
89	林越跡寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡(林タカヤマ古墳跡部)	牛産遺跡	古墳	須奈原塚3、南加賀古墳跡北群
	林遺跡(林オオミダニ古墳跡部)	牛産遺跡	古墳	須奈原塚2、土師器坑1、南加賀古墳跡北群
	林遺跡(林御跡部)	牛産遺跡	古代	製鉄炉2、製瓦窯4、磨石炉2、磨石坑2
91	丹津5・12号遺跡	牛産遺跡	古代(平安)	須奈原塚2、南加賀古墳跡北群
	丹津シンプザワ製鉄跡	牛産遺跡	古代(平安)	製鉄炉4、製瓦窯3
92	丹津古窯跡部	牛産遺跡	古代、中世(鎌倉)	須奈原塚36(丸陶窯窯5)、土師器坑19、製瓦窯2、加賀窯1、南加賀古墳跡北群
93	丹津ノアケ古窯跡部	牛産遺跡	古墳	須奈原塚7、製瓦窯1、南加賀古墳跡北群
94	丹津1号窯跡	牛産遺跡	古代(平安)	製瓦窯
95	丹津ウタニ遺跡	牛産遺跡	不詳	製鉄炉1、製瓦窯1
96	丹津ショウガタニ遺跡	牛産遺跡	古代(平安)	須奈原塚1、製鉄炉1、南加賀古墳跡北群
97	丹津2号窯跡	牛産遺跡	不詳	製瓦窯
98	丹津アヤマ古窯跡	牛産遺跡	不詳	製瓦窯
99	丹津オオニ遺跡	牛産遺跡	古代(奈良)	須奈原塚2、製鉄炉1、南加賀古墳跡北群
100	ニツ製一貫山古窯跡部	牛産遺跡	古代	須奈原塚12、土師器坑28、製鉄炉1、製瓦窯2、南加賀古墳跡北群
101	ニツ製豆岡山古窯跡部	牛産遺跡	古墳～古代	須奈原塚4
102	ニツ製日向山古窯跡部	牛産遺跡	古墳～古代(平安)	須奈原塚12(焼陶窯窯2、丸陶窯窯2)、南加賀古墳跡北群
103	ニツ製沼津古窯跡部	牛産遺跡	古墳	須奈原塚3、南加賀古墳跡北群
104	ニツ製山古窯跡部	牛産遺跡	古墳	須奈原塚8、南加賀古墳跡北群
105	ニツ製山古窯跡部	牛産遺跡	古墳	須奈原塚5、南加賀古墳跡北群
106	ニツ製津古窯跡部	牛産遺跡	古代(奈良)	須奈原塚1、製鉄炉1、製瓦窯1、南加賀古墳跡北群
107	ニツ製川古窯跡部	牛産遺跡	古代(奈良)	須奈原塚1、製鉄炉1、南加賀古墳跡北群
108	ニツ製赤谷古窯跡部	牛産遺跡	古代(平安末)	須奈原塚2、加賀窯1、南加賀古墳跡北群
109	ニツ製赤谷1～2号製鉄跡	牛産遺跡	不詳	製鉄2
110	ニツ製赤谷古窯跡部	牛産遺跡	古代	須奈原塚6(丸陶窯窯1)、南加賀古墳跡北群
111	ニツ製カセイ古窯跡部	牛産遺跡	不詳	須奈原塚2、南加賀古墳跡北群
112	矢田野岡山古窯跡部	牛産遺跡	古代(奈良)	須奈原塚6、南加賀古墳跡北群
113	矢田野長尾山遺跡	牛産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須奈原塚4、加賀窯2、製鉄炉3、南加賀古墳跡北群
114	稲宮トウガヤチ古窯跡部	牛産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須奈原塚6、加賀窯2、南加賀古墳跡北群
115	稲宮A遺跡	散布地	中世	
116	稲宮B遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷1～2号窯跡	牛産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
118	小天王谷1号製鉄跡(天王山1号製鉄跡)	牛産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷2～3号製鉄跡	牛産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	牛産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡部	牛産遺跡	不詳	
122	那谷1号窯跡	牛産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯
123	矢田野カサケツ古製鉄跡	牛産遺跡	不詳	製鉄3
124	那谷1～2号竪穴	竪穴墓	不詳	
125	那谷1～5号竪穴	竪穴墓	不詳	
126	那谷6号竪穴	竪穴墓	不詳	
127	那谷中山古製鉄跡	牛産遺跡	不詳	製鉄炉3
128	上風尾ユルイデン製鉄跡	牛産遺跡	不詳	製鉄炉2
129	上風尾ジャモンニ遺跡	牛産遺跡	古代(平安)	須奈原塚4、製鉄3、南加賀古墳跡北群

No	名称	種別	時代	備考
130	上辰屋サンマイダニ遺跡	牛車遺跡	古代(平安)	遺跡第4～5、製鉄2、横穴1、地下式1、南加賀古宮跡北部
131	上辰屋サンマイダニヤマ古宮跡部	牛車遺跡	古墳・古代(奈良)	遺跡第4、南加賀古宮跡北部
132	上辰屋サンダシ古宮跡部	牛車遺跡	古代(奈良)	遺跡第2、南加賀古宮跡北部
133	上辰屋トリダニ古宮跡部	牛車遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	遺跡第1、製鉄1、南加賀古宮跡北部
134	上辰屋オジマヤマ古宮跡部	牛車遺跡	中世(鎌倉)	加賀第4、製鉄1
135	上津1～3号製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1、2
136	上津本倉寺跡	古墳跡	中世(室町)	製鉄1
137	戸津八幡神社前遺跡	散佈地	古代～中世	
138	上辰屋郡谷口遺跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1
139	馬場ニカヤマ遺跡	牛車遺跡	古代(平安)	遺跡第5、製鉄1、南加賀古宮跡北部
140	馬場タニヤマ遺跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1
141	上辰屋オウジョウヤマ遺跡	牛車遺跡、社寺跡、墳墓	古代(平安)～中世	遺跡第5、製鉄1、2、墳墓、南加賀古宮跡北部
142	上辰屋ハカランダニ古宮跡部	牛車遺跡	中世(鎌倉)	加賀第2
143	面上谷古宮跡部	牛車遺跡	中世(鎌倉)	加賀第10、製鉄2
144	西原フルヤシキ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカクソ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄2
146	野口トドヲ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄2
147	野口中島墓跡	墳墓	中世(鎌倉)	牧草場比定地
148	石山田ヤマ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1複数
149	川口神社製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄
150	川口エンドウ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄
151	川口遺跡	散佈地	不詳	
152	林ノ幡神宮経塚	経塚	中世(鎌倉)	
153	林館跡	城館跡	中世	
154	津波倉神社遺跡	散佈地	中世	
155	津波倉ホツシ遺跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式1、2、基調査
156	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
157	小山田コガタニ遺跡	散佈地	不詳	龍潭散佈地
158	小山田スピトキ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1、2
159	小山田オウサダニ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄2
160	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1、製鉄原典数
161	本郷古墳跡	古墳	古墳	円墳4
162	本郷古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
163	本郷城跡	城館跡	不詳	
164	本郷島早遺跡	散佈地	縄文	
165	本郷A遺跡(本郷遺跡H地区)	牛車遺跡	古代(奈良)	製鉄1、製鉄原典2
166	本郷B遺跡	散佈地	古代(平安)～中世	
167	本郷C遺跡	散佈地	弥生	
168	本郷遺跡A地区(1号遺跡)	牛車遺跡	古代(平安)	製鉄原典3、龍潭散佈地
169	本郷遺跡B地区(2号遺跡)	牛車遺跡	古代(平安)	製鉄1、2、製鉄原典2
170	本郷遺跡C地区(3号遺跡)	牛車遺跡	不詳	製鉄
171	本郷遺跡D地区(4号遺跡)	牛車遺跡	不詳	製鉄1、製鉄原典1
172	本郷遺跡E地区(5号遺跡)	牛車遺跡	不詳	製鉄
173	本郷遺跡F地区(6号遺跡)	牛車遺跡	不詳	製鉄
174	本郷遺跡G地区(7号遺跡)	牛車遺跡	不詳	製鉄1
175	本郷遺跡D地区(8号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴1
176	大池遺跡	散佈地	不詳	龍潭散佈地
177	長谷貝塚屋の山遺跡	散佈地	不詳	龍潭散佈地
178	三谷遺跡	散佈地	縄文	
179	三谷B遺跡	散佈地	弥生～古墳	
180	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
181	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
182	三谷大谷製鉄跡	牛車遺跡	不詳	製鉄1、龍潭散佈地
183	鎌倉寺城跡	城館跡	不詳	小規模な野跡か
184	鎌倉寺ムコヤマ製鉄跡	牛車遺跡	中世(鎌倉)	製鉄1、製鉄原典1
185	鎌倉寺カシヨウタン遺跡	牛車遺跡	古墳	製鉄原典3、龍潭散佈地
186	鎌倉寺A遺跡	散佈地	不詳	龍潭散佈地
187	本江古宮跡	牛車遺跡	近世	製陶
188	鎌倉寺寺跡	牛車遺跡	近世末	西興九寺(鎌倉寺)
189	鎌倉寺丸塚跡	牛車遺跡	近世前期	縄文
190	鎌倉寺跡	社寺跡	不詳	龍潭散佈地
191	安宅遺跡	その他	不詳	龍潭散佈地
192	安宅住吉神社遺跡	散佈地	不詳	
193	安宅中庭墓跡	その他の墓	中世(室町)	龍潭散佈地
194	安宅大塚古墳	不詳	不詳	横穴塚と墳丘の首石とも、堀存せず
195	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部、本丸跡台は小松市指定史跡
196-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
196-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
197	幸町遺跡	牛車遺跡	中世(室町)	龍宮
198	多々神社境内遺跡	散佈地	中世(室町)	理崎真田土
199	本折城跡	城館跡	中世(室町)	本折氏屋敷伝承地
200	八日山地方遺跡	散佈地	縄文・中世	
201	上小松遺跡	城館跡	弥生	龍潭集落
202	須賀遺跡	散佈地	古代(平安)	
203	稲川貝塚遺跡	集落跡	弥生	
204	稲川貝塚B遺跡	散佈地	弥生	

No	名称	種別	時代	備考
205	越田 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
206	越田 B 遺跡	散布地	古墳	
207	藤原遺跡	城跡跡	中世 (室町)	
208	藤原遺跡	散布地	古墳～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・新川新七郎重親居館伝承地
209	棟遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
210	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
211	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
212	長田南遺跡	散布地	弥生・古代 (平安)	
		集落跡	中世 (室町)	
213	中ノ江遺跡	散布地	古墳	
214	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	
215	野田フルゲシキ遺跡	集落跡	中世	
216	小長野遺跡	散布地	不詳	
217	小長野 B 遺跡	散布地	弥生	
218	小長野 C 遺跡	集落跡	古代	
219	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
220	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
221	年島宮の島遺跡	集落跡	古代 (平安)	
222	千代子ジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
223	年島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
224	平面榑川遺跡	集落跡	弥生	
225	平面榑川 B 遺跡	散布地	弥生	
226	白江榑川遺跡	集落跡	弥生・中世	
227	白江遺跡	城跡跡	中世 (室町)	白江新助墓塚伝承地
228	白江遺跡	散布地	古墳～中世	藤町遺跡の一部
229	藤町遺跡	集落跡	弥生～中世	
230	一針遺跡	散布地	縄文	
231	一針 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
232	一針 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
233	定境坊跡	社寺跡	中世 (室町)	
234	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
		散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
235	千代オオキタ遺跡	古墳	古墳	方墳 6
236	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
237	千代城跡	城跡跡	中世 (室町)	
238	千代本村遺跡	散布地	古墳	
239	横地遺跡	散布地	縄文	
240	笹々木遺跡	集落跡	古代	附式塚 7 基 (奈良)
241	笹々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
242	笹々木ノサハタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
243	笹々木ノサハタケ B 遺跡	集落跡	弥生・平安	
244	杉川遺跡	散布地	古代	
245	杉村宮跡	生産遺跡	近世末	西興九谷「杉村宮」、連立式登壇
246	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
247	吉竹 B 遺跡 (吉竹遺跡 19 地区)	散布地	古墳	旧河邊の御跡
248	吉竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
		散布地	縄文	
249	千本野 (A) 遺跡	古墳	古墳	方墳 8
		集落跡	古墳	
250	榑川 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土上の山
251	榑谷古墳・榑谷 2 号墳	古墳	古墳	切石積横穴式古墳
252	若村オソボ山 1 号墳跡	生産遺跡	古墳	南赤旗宮
253	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	新徳は加賀国府・国分寺阿曇山神社寺院跡の一部
		散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代 (奈良)・中世 (鎌倉)	
254	八幡遺跡	その他の墓	古代 (平安)	土塚墓
		古墳	古墳	円墳 8、本志社土室
		生産遺跡	近世末	西興九谷「八幡若杉塚」、八幡 6 号墳を削平して築いた連立式登壇
255	完木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
256	軒海西方寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
257	大谷口遺跡	散布地	弥生	
258	軒海遺跡	散布地	弥生～中世	
259	龜山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
260	軒海中里墓群	その他の墓	中世 (室町)	集石墓 9
261	軒海東寺	社寺跡	古代 (平安)	大興寺伝承地
262	西芳寺遺跡	社寺跡	古代 (平安)	西芳寺伝承地
263	吉野しのまち遺跡	集落跡	弥生～中世	
264	吉野遺跡	集落跡	古代 (平安)	
265	吉野フランド遺跡	散布地	古代 (平安)	
266	十九堂山遺跡	社寺跡	古代 (平安)	加賀岡分寺傳承地
267	十九堂山墳墓群	その他の墓	中世 (室町)	
268	吉野橋穴	不詳	不詳	
269	吉野シマ遺跡	散布地	古代 (平安)～中世	

No	名称	種別	時代	備考
270	南野台遺跡	散布地	縄文	
271	小野遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府所在地の一隅
272	小野スキノ平遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府所在地の一隅
273	小野宮跡	牛車遺跡	近世末	西側九宮・小野宮
274	前田利隆公灰塚	その他の墓	近世	前田利隆公が菩提に付された地とされる
275	福田の宗塚	その他	近世末	菅原の菅原親朝と藤原方法を記した石棧、小松市指定史跡
276	福田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
277	福田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
278	福田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
279	福田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
280	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世(室町)	
281	福田遺跡	散布地	古代	
282	福田塚	不詳	不詳	
283	福田後山古墳群	古墳	古墳	円墳9、木桶直葬、木志駄土室
284	福田山古墳群	古墳	古墳	円墳12、方墳4
285	福野御所古墳	古墳	古墳	円墳
286	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高埴性集落、河田山10～12号墳が重複
		その他の墓	古代(奈良)	大塚墓、河田山1号墳の西側に所在
287	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳2、前方後方墳2、円墳22、方墳34、不明1、木桶直葬、木志駄土室、切石纏繞式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式穴、河田山54号墳の南に開口
288	河田山1号塚跡	牛車遺跡	古代(奈良)	須奈原塚、能美古堂跡南群 八里・河田山支群、河田山60号墳の北西群中に所在
	河田山古堂跡	牛車遺跡	不詳	須奈原塚、能美古堂跡南群 八里・河田山支群
289	河田B遺跡	散布地	縄文・古代(奈良)	
290	河田C遺跡	散布地	不詳	
291	下八里横穴墓	横穴墓	不詳	地下式穴6、横穴1、不明1、3地点で計8基
292	穴堀横穴墓	横穴墓	不詳	横穴2基
293	上八里横穴墓	横穴墓	中世(室町)	横穴11基
294	上八里中世墓跡	その他の墓	中世(室町)	
295	上八里A遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
296	上八里B遺跡	散布地	古代(奈良)	
297	上八里C遺跡	横穴墓	古墳	横穴2基
298	上八里D遺跡	散布地	古代(奈良)	
299	上八里E号塚跡	牛車遺跡	古代(奈良)	須奈原塚、能美古堂跡南群 八里・河田山支群
300	上八里F号塚跡	牛車遺跡	不詳	地下式穴墓、能美古堂跡南群 八里・河田山支群
301	谷内横穴	不詳	不詳	
302	河田原遺跡	散布地	縄文・中世	
303	下出地刺遺跡	散布地	不詳	
304	佐野A遺跡	散布地	弥生	
305	佐野B遺跡	散布地	古墳	
306	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
307	狹野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
308	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
309	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳7
310	八里向山A遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高埴性集落
311	八里向山B遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代(奈良)	加賀国府・国分寺岡田山寺院群の一
312	八里向山C遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代(奈良)	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳1、木桶直葬
313	八里向山D遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳2、木桶直葬
314	八里向山E遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳1
		集落跡	古代	
		散布地	縄文	
315	八里向山F遺跡	古墳	古墳	円墳10、木桶直葬
		その他の墓・横穴墓	中世(室町)	集石墓1、横穴3
316	八里向山G遺跡	散布地	弥生	
317	八里向山H遺跡	社寺跡	古代(奈良)	
318	八里向山I遺跡	牛車遺跡	古代(奈良)	集石墓群、96基調査
319	八里向山J遺跡	牛車遺跡	古墳	須奈原塚、能美古堂跡南群 八里・谷台支群
320	早川A遺跡	牛車遺跡	不詳	須奈原塚、能美古堂跡南群 八里・谷台支群
321	早川B遺跡	牛車遺跡	不詳	須奈原塚、能美古堂跡南群 八里・谷台支群
322	早川C遺跡	牛車遺跡	不詳	須奈原塚
323	早川D遺跡	散布地	縄文	
324	早川E遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺岡田山寺院群の一
325	早川F遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺岡田山寺院群の一
326	早川G遺跡	散布地	不詳	
327	蓮葉寺・ケボタA遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
		集落跡	古代(平安)～中世	
328	蓮葉寺古堂跡	牛車遺跡	古代(平安)	社寺(須明寺)又は城跡伝承地
	石明寺古墳	古墳	古墳	須奈原塚(瓦葺纏繞式)
329	陰明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
329	陰明寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、覆載ある伝承地の一
330	蓮葉寺遺跡	散布地	縄文	

No	名称	種別	時代	備考
331	宮の奥拜塚	拜塚	平安～鎌倉	塚5基
332	瑞泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院。樹叢ある伝承地の一
333	常徳寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇田郡地の居七跡とも
334	藤川寺跡	城跡跡	不詳	一向一揆・宇田郡地の居七跡とも
335	藤川城跡	城跡跡	不詳	地下式坑?
336	仏太寺伝説寺跡	社寺跡	中世	
337	仏太寺とうの地古墳	古墳	古墳	
338	仏生寺跡	社寺跡	中世	
339	仏生寺塚	拜塚	中世	
340	フッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳2、本志志土室
341	中海B遺跡	集落跡	古墳～中世	
342	(伝)長寛寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院。地名伝承のみ
343	中海遺跡・岩瀬遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
344	岩瀬上野遺跡	散布地	縄文	
345	長寛寺中世墓跡	その他の墓	旧石部	
346	赤穂古口遺跡	散布地	中世	
347	赤穂古木古墳穴群	縄文	縄文	存在自体が不明。5基開口とされる
348	赤穂谷五平ノキ古墳穴群	縄文墓	縄文	横穴9、地下式坑4
349	赤穂寺跡	社寺跡	不詳	
350	岩瀬城跡	城跡跡	古代(平安)	中宮八院
351	小山城跡	城跡跡	中世	
352	仏前前庭敷跡・仏前納墓	城跡跡	中世	
353	赤口遺跡	その他の墓	古代(平安)	小松市指定史跡
354	赤口遺跡	散布地	縄文	
355	下赤口中世墓跡	その他の墓	中世	
356	下赤口城跡	城跡跡	縄文墓	横穴3
357	赤倉城跡	城跡跡	中世(室町)	
358	中ノ峠北城跡	城跡跡	中世	
359	飛山城跡	城跡跡	中世	
360	藤の木山遺跡	散布地	縄文	
361	藤川寺跡	社寺跡	不詳	
362	藤川寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
363	松谷庵寺	社寺跡	古代(奈良)	8世紀前半に遡る古代山林寺院
364	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
365	平野原跡	城跡跡	中世(室町)	一向一揆・平野某菩提伝承地
366	江島城跡(山神山古跡)	城跡跡	中世(室町)	
367	滝谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
368	(伝)滝谷谷松園寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇津呂内渡守遺城伝承地
369	滝谷谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
370	滝谷谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
371	滝谷谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
372	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
373	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
374	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
375	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
376	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
377	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
378	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
379	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
380	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
381	赤倉谷城跡	城跡跡	中世(室町)	
382	和気滝山谷2号遺跡	生産遺跡	古代(平安)	土師器焼成坑、能美古窯跡南群 滝山谷支群
383	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代(奈良末～平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 滝山谷支群
384	和気古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群
385	和気及口A遺跡	散布地	縄文	
386	和気公文屋遺跡	城跡跡	不詳	
387	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 滝山谷支群
388	虚空蔵城跡	城跡跡	中世	
389	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	
390	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	
391	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	
392	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	
393	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	
394	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	
395	虚空蔵山城跡	城跡跡	中世	

第二章 古府しのまち遺跡発掘調査

第1節 調査に到る経緯

小松市古府町地内で計画された住宅新築工事に伴い、平成28年8月13日付けで國本季史氏より埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（古府しのまち遺跡）に含まれていたため、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査が必要との旨を回答し、9月23日に試掘調査を実施。対象地に設定した3か所のうち、北側の試掘坑1か所を除き、埋蔵文化財が確認された。よって、工事実施にあたっては、事前に発掘調査を実施するなど、埋蔵文化財に対する適切な保護措置が必要との旨を9月23日付けで通知した。

住宅新築工事の計画では、擁壁工事のみ、基礎が埋蔵文化財遺構確認面まで達することから、埋蔵文化財の現状保存は不可能と判断され、当初、その範囲134㎡を発掘調査対象としている。11月21日付けで事業主からの発掘調査依頼の提出、同日付けで発掘調査に関する協定書の締結があり、11月28日に発掘調査の実施に至った。その後、発掘調査対象とした134㎡の内、進入箇所にあたる南側9㎡は、削平を伴う工事ではなく盛土工事へと計画変更する連絡を受けたため、発掘調査ではなく工事立会へと変更し、実質的には発掘調査は125㎡のみを対象とした。

なお、当調査の原因が個人住宅の建設であったため、国庫補助事業として発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

1 調査方法

調査区全体を対象とし、国土座標に基づき5mスパンのグリッドを設定した。擁壁工事の範囲に合わせて、重機による表土除去を行い、人力掘削による包含層掘削、遺構精査、遺構掘削作業を実施した。その他の遺構は、半裁またはアゼを設け土層確認した。遺構図面は、平面図・断面図を1/20または1/10で作成し、全体遺構図は1/40でフィールドステーションを利用して作成している。随時必要に応じて、モノクロのネガ及びリバーサルのポジフィルムとデジタルカメラを用いて写真記録を撮った。

なお、調査区は南北に長いコに字の形状をしていることから、調査区の東側、北側、西側と区分して、遺構検出面に至るまでは、遺物の取り上げを行っている。

2 発掘作業の経過

平成28年11月28日	発掘調査開始。重機による表土除去。作業員による調査区東側より遺構精査
11月29日	基準点測量・水準測量およびグリッド設定。
11月30日	作業員による東側より遺構検出作業、ビット半裁作業の開始。
12月2日	調査区東側調査完了。北側遺構掘削作業。
12月3日	調査区北側、西側遺構検出作業及び掘削作業。
12月4日	SK04完掘。全体平面図作成。
12月5日	124㎡を対象に全景写真撮影、発掘調査終了。
平成29年1月9日	進入箇所にあたる南側部分の工事立会を実施。遺構に影響がないことを確認して、すべての現地対応調査終了。

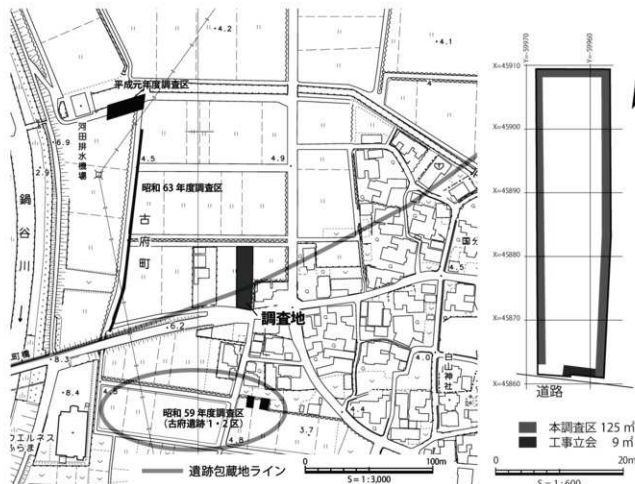
3 出土品整理等

出土品整理は令和2年度に実施した。出土品の洗浄・注記作業を整理作業員により行い、分類・接合作業、実測作業、トレース作業を整理作業員・調査員で実施した。

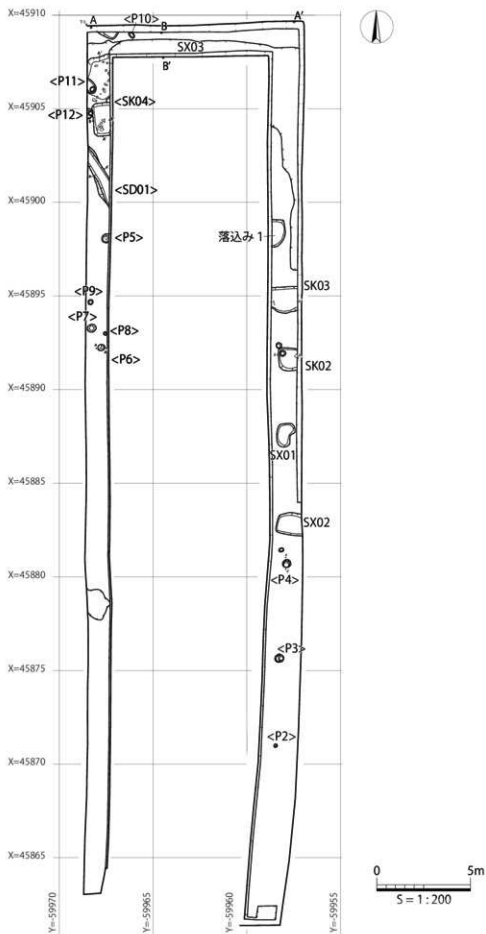
第3節 遺跡の概要と既往の調査

古府しのまち遺跡は、古府町集落の北西に広がる遺跡であり、西側は鍋谷川、南には梯川が展開する標高4mをきる低地部分に所在する。現在でも遺跡範囲のほとんどに田んぼが広がっている状況である。既往の調査では、土地改良総合整備事業に伴う用水部分の調査（昭和63年度・市調査）や水田農業確立排水対策事業河田地区河田排水機前面の遊水地箇所の調査（平成元年度・県調査）があげられる。昭和63年度調査では、幅2mと狭いが、南北約140mにわたり調査を行っており、耕地整理等でかなりの土の移動や削平を受け、遺構の遺存状態を良好ではなかったと報告されている。しかし、長大な調査区からは、北端で多量に出土資料にあたっており、南側へ進むにしたがって遺構・遺物ともに希薄になることや、南側88mは旧河道と考えられる砂層が拡がり、遺構は確認されなかったことがわかっていてる。

出土遺物は、どちらの調査区からも弥生時代終末期から古墳時代初頭（月形式～古府クルビ式）の土器や、6世紀代、8世紀代がみられる。昭和63年度調査からは9世紀後葉～10世紀前半の遺構及び資料もみられる。



第4図 古府しのまち遺跡 調査区位置図 (S=1:3,000)、調査区範囲図 (S=1:600)



第5図 古府しのまち遺跡 全体図 (S=1:200)

第4節 発見された遺構と遺物

1 基本層序

調査区北側断面は農道に面していることから、現況面下で深さ20～30cmの農道・畔土があり、その下10～15cm程度の耕作土層、この直下に耕作土と灰黄褐色土（包含層）の攪拌土が認められる（第6図 調査区北側断面参照）。

なお、西側の田面と比較すると遺構検出面までは10cmとないため、純粋な遺物包含層は認められず、攪拌された状態で遺構検出に至っている。

2 遺構と遺物

遺構の密度は高くなく、遺構の切り合いもみられなかった。主なものとしては溝（SD01）1条、土坑（SK02～04A・B）3基、ビット数基があげられる。調査区の北側及び東側上部（SX03）は大規模な攪拌を受けており、この上部から時期幅をもつ多量の遺物が出土した。

SD01

調査区の西側上半部分で検出した。北西―南東方向に傾きをもつ。幅は1.1m、深さは残りのよいところで25cm程度あり、底面は平坦である。北西に向かうに従い標高地は低くなり、検出範囲内だけでも10cmの比高差がみられる。土層堆積状況は、西側からの地山崩壊土が多くみられる。2層より細かい土器片が出土。図化にまでは至っていない。土質や遺物から古代VI期併行かと思われる。

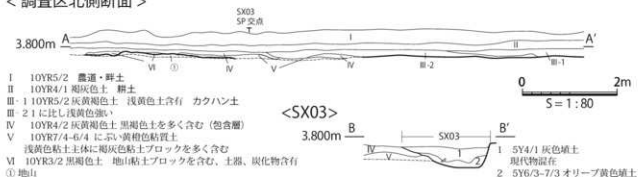
SK02・SK03

いずれも調査区東側で検出している。SK02は、東側プランは調査区範囲外に延びているようで、全形状は確認できてない。深さは15cm程度と浅く、純粋な土坑覆土は3層が該当する。1-2層、2層は3層を切るビットの土層に該当する。出土土器は1層上面より、No.1の出土がみられる。その他の資料としては、須恵器、土師器ともに細片の出土がみられる。SK03は、土坑としたが、調査区内、東西に上端の立ち上がりは確認できていない。覆土は単純1層のみで、SK02の1層と近似することから、15世紀以降の遺構と考えられる。

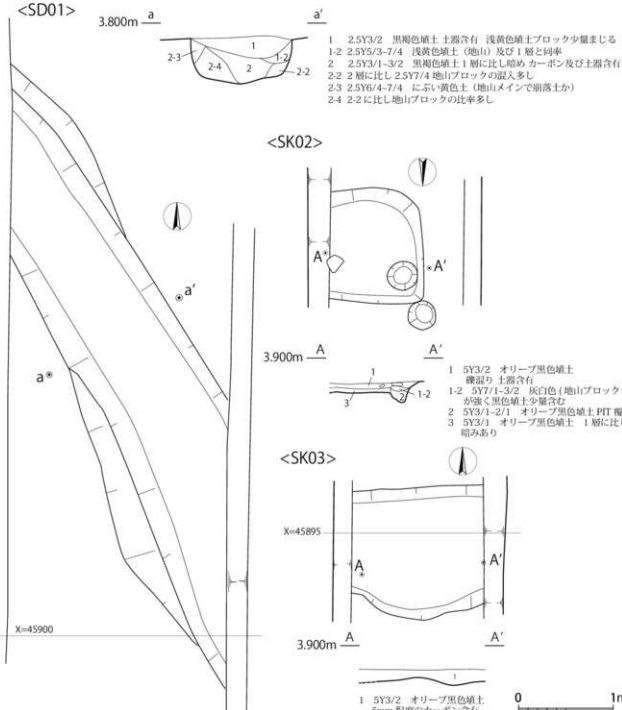


調査区西側、遺構検出状況（南から）

< 調査区北側断面 >



<SD01>



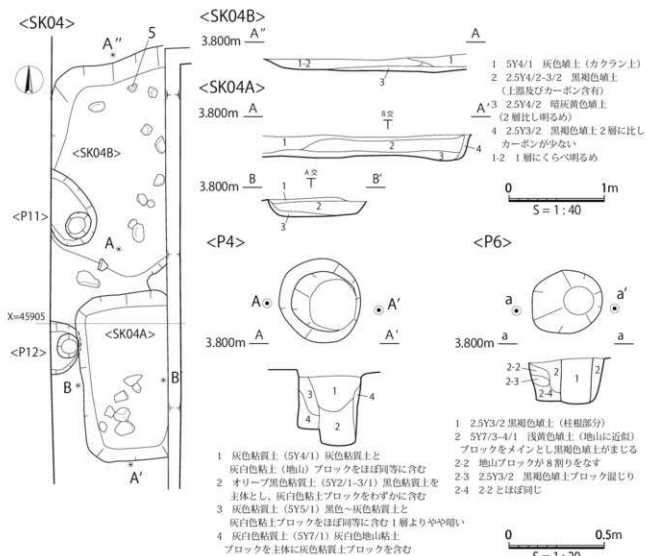
第6図 古府しのまち遺跡 主な遺構と断面 (調査区北側断面 S=1:80、その他の遺構 S=1:40)

SX01、02、03

いずれも覆土は旧耕土である。SX01及びSX02は5cm程度と浅く、近代以降に掘削されたものと考えられる。SX03は、調査区北側及び東側上部に広がる。出土遺物は、SX02から№14、15、SX03から№16～20が出土している。いずれも周辺の混入物と考えられ、すべて古代に位置づけられる。№17はほぼ略完形を呈する。時期は古代Ⅳ期併行のものと考えられる。

SK04A・B

遺構検出状況段階は、SX03（攪乱）の覆土（灰色埴土）が上面に被っていたことから、一連のものにみえていた。そこで、畔を設けて全体的に掘り下げたところ、2つの土坑に分かれることが判明した。いずれの土坑からは6～10cm程度の礫が出土しており、中には凝灰岩質で被熱したものとみられる。この2つの土坑は、土層断面からは明確な切り合いを伴わないため、判断できなかった。形状は、Aが不定形なのに対しBは方形状を呈している。出土遺物はSK04Aからは、須恵器杯蓋つまみ部分№4、SK04Bからは瓶の底部№5や砥石（№7）が見つかった。№4は形状から古代Ⅲ～Ⅳ期併行と考えられる。№7の砥石は、側面及び平面に使用痕がみられ、平面には部分的に金属痕跡がみられる。



第7図 古府しのまち遺跡 SK04及びピットの平面図及び断面図（SK04 S=1:40、ピット S=1:20）

P2

調査区東側の南、X=45865、Y=59969に位置する。小型で建物の柱跡というよりは、杭穴か。出土遺物は、くの字口縁裏の口縁片1点のみ出土している。

P3

調査区東側、X=45875、Y=59968に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。出土遺物は土師器及び須恵器の細片が出土している。

P4

調査区東側の南、X=45880、Y=59958に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層は、柱痕及び掘り方と明瞭に区分可能で、遺物は、柱痕上面で№9、10が、掘り方より№8の須恵器壺か坏の口縁片が出土している。№9は、土師器皿で、口縁部分は欠損するものの、底部は全周し、回転系切り痕が確認できる。№10は皿Bである。底部片と胴部片は未接合であるが、胎土や色調等から同一個体と判断し、図化復元している。いずれも古代VI3期併行と考えられる。

P5

調査区西側の北部分、X=45898、Y=59967に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。柱痕部分の土質は、オリブ黒色粘土である。遺物は、№11と土師器細片が出土している。№11は、黒色壺で、口縁片と胴部片は未接合であるが、胎土や色調等から同一個体と判断し、図化復元している。表面摩耗が激しいが、内面はミガキ調整が施されていることがわかる。時期は古代VI期併行か。

P6

調査区西側の北部分、X=45893、Y=59967に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層は、柱痕及び掘り方と明瞭に区分可能で、柱痕上面で№12、13及び土師器の細片が出土している。№12は、須恵器の坏蓋片である。口縁残存率2/36以下と細片で、詳細な時期は不明瞭である。№13は土師器壺もしくは皿の底部片である。底面には回転系切り痕がみられる。時期は古代VI-2、3期併行か。

P7

調査区西側の北部分、X=45893、Y=59967に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層は2.5Y4/1黄灰色粘土で、P4やP6とは土質が異なる。出土遺物は土師器細片が出土している。

P8

調査区西側の北部分、X=45893、Y=59967に位置する。掘り方を伴わない杭穴と思われる。土層はP4やP6と同様である。出土遺物は土師器細片が出土している。

P9

調査区西側の北部分、X=45895、Y=59967に位置する。掘り方を伴わない杭穴と思われる。土層はP4やP6と同様である。出土遺物は土師器細片が出土している。

P10

調査区北側の西部分、X=45909、Y=59967に位置する。掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。土層はP7と同様である。出土遺物は古式土師器の細片が出土している。

P11,12

P11はSK04B内南西部に位置する。遺物の出土はない。P12はSK04Aの西側に隣接したところに位置する。出土遺物は土師器片が出土している。

その他の遺物

その他の出土遺物は、おちこみ周辺出土は№21～24がある。21は近世陶磁器で、越前か。22

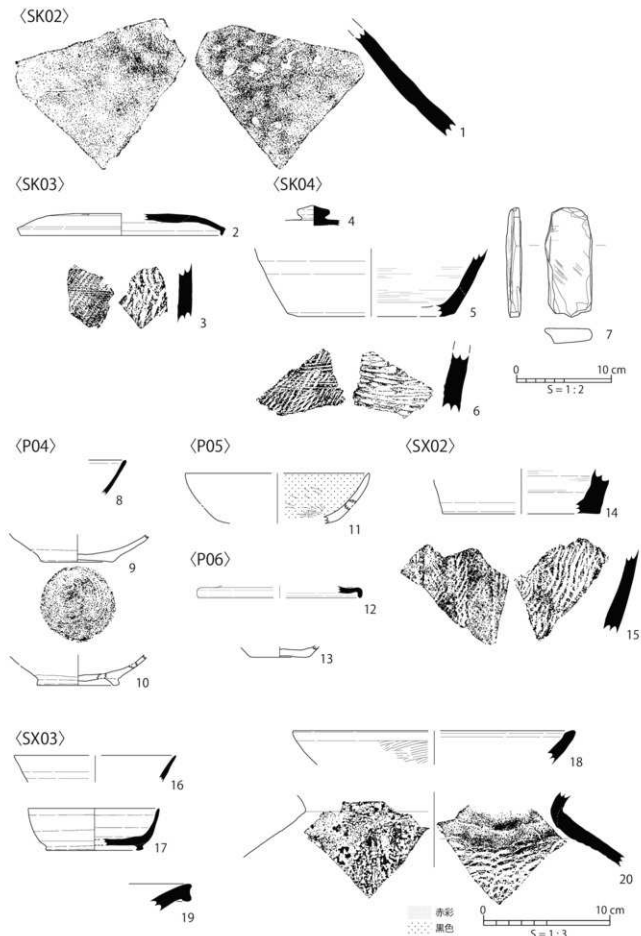
は杯蓋で口縁部分は欠ける。つまみ部の形状から古代Ⅲ期併行か。24 は長頸瓶の口縁から頸部にかけてのみ残存する。調査区東側出土は№ 25 ～ 27 がある。25 は瓶の底部片で、底面には工具痕がみられる。26 は甕の口縁片である。27 は完形の土鍾である。中世以降に位置づけられるか。北区東側は№ 28 ～ 47 がある。図化していないものも含めて土師器埴や皿の底部が多く出土しており、時期は古代Ⅵ-2、3 期併行と思われる。須恵器は坏 A (29)、盤 A (31)、盤 B (32)、瓶 D (40、41、42)、鉢 (44)、瓶 A (43) と破片であるが、複数の器種がみられる。時期は古代Ⅲ～Ⅳ期、もしくはⅥ期以降の二時期がみられる。46 は長釜の口縁片である。47 は完形の陶鍾である。46、47 はいずれも古代Ⅵ期併行と思われる。北区出土は№ 48 ～ 55、長釜口縁片 (48)、鍋口縁片 (49)、小型壺 (54)、鉢 B (50)、土師器皿 (51～53)、中世のかわらけ (55) がみられる。時期は北区東側と同様で、古代Ⅲ～Ⅳ期、もしくはⅥ期以降の二時期と思われる。№ 56 は調査区内、№ 57 は表採資料である。いずれも古代Ⅱ-3～Ⅲ期併行か。

第5節 まとめ

今回の調査では、耕作土直下であること、調査区北側は大きく攪拌を受けており、擁壁工事部分と小規模である中で、かろうじて建物の柱と考えられるピット数基と土坑を確認することができた。また本調査でも、昭和 63 年度調査と同様で遺跡の南辺であることがわかった。ピットは、土質から大きく 2 パターンみられ、黒色埴土を呈するものは古代Ⅵ-2、3 併行である。黄灰色埴土のものは、それらより古い遺構である可能性が高く、細片や攪拌された土中から出土している土器や既往の調査事例から、古代Ⅲ～Ⅳ期併行に位置づけられるものと思われる。遺物は、遺構及び攪拌された箇所を図化には至っていないものも含めて、弥生時代終末期、8～10 世紀、15 世紀、近世と幅広く出土しており、梯川流域にみられる弥生時代から古代、中世にかけての複合遺跡と同様であると言えよう。

引用参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1987『小松市古府遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1991『古府しのまち遺跡発掘調査報告』
- 小松市教育委員会 1995『古府しのまち遺跡』
- 田嶋明人 1986『9 世紀後半から 13 世紀にかけての土師器の変遷』『漆町遺跡 I』石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1998『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題 (報告編)』



第8図 古府しのまち遺跡 出土遺物実測図1 (7はS=1:2, 他はすべてS=1:3)

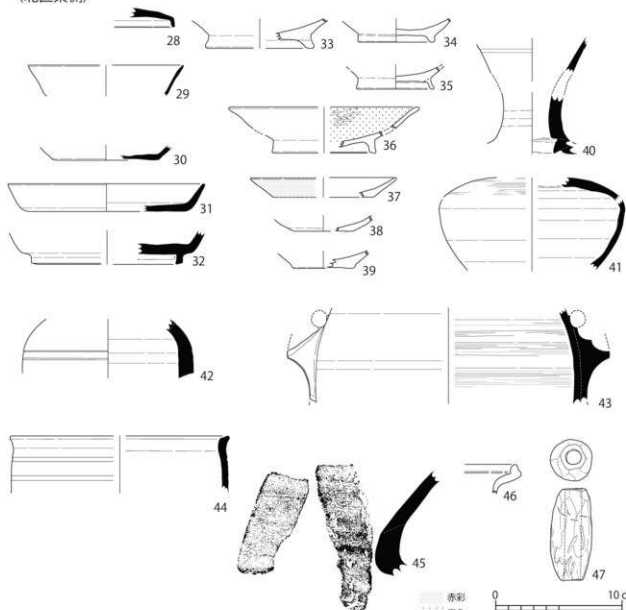
〈おちこみ周辺〉



〈東側〉

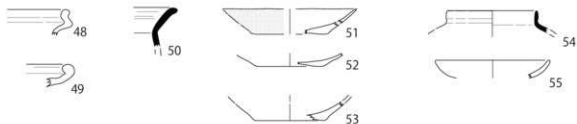


〈北区東側〉

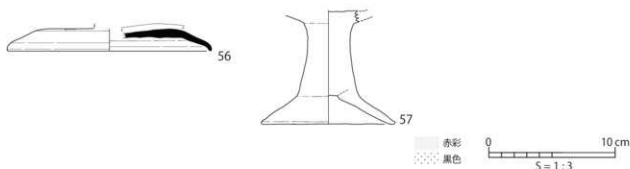


第9図 古府しのまち遺跡 出土遺物実測図2 (S=1:3)

(北区)



(その他)



第10図 古府しのまち遺跡 出土遺物実測図3 (S=1:3)

第2表 古府しのまち遺跡 出土遺物観察表

図版No.	実測No.	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	時期	調整	備考
1	13	中世陶器	甕	SK02	現存高:11.6g	卑焼	粗粒砂(少)含有	7.5Y7/1 灰白色	—	13Cか		胴部上半片
2	14	須恵器	坏蓋	SK03	口径:[15.9] 部高:4.7	卑焼	粗粒砂(少)含有	N6/ 灰色	口:10/36	前期か		内外面:ロクロナデ、上面へろ削り
3	15	須恵器	甕	SK03	部高:5.7	卑焼	細粒砂(少)含有	7.5Y6/1 灰色	—	—		外面:平行削き、内面同心円当て具焼
4	16	須恵器	坏蓋	SK04A	つまみ径:2.6 部高:4.6	卑焼	粗粒砂(少)含有	N7/ 灰白色	—	Ⅱ-Ⅳ期か		内外面:ロクロナデ つまみ部のみ
5	18	須恵器	甕 A	SK04B No.2	部高:5.4 底径:[13.4]	卑焼	細粒砂(黒色粒)含有	7.5Y7/1 灰白色	—	—		内外面:ロクロナデ
6	19	須恵器	甕	SK04B 胴部	部高:5.7	卑焼	3mm以上の角粒含有	N6/ 灰色	—	—		外面:平行削き、内面平行当て具焼
7	76	砥石		SK04B	全長:5.76 最大幅:2.49 重量:18.5g				—			石材:粘板岩
8	22	須恵器	碗か	PO4 胴り方	部高:2.8	卑焼	中粒砂(多)含有	N5/ 灰色	—	前期か		内外面:ロクロナデ
9	20	土師器	甕 A	PO4 柱脚上壁	部高:2.23 底径:6.8	良好	中粒砂(多)含有	10Y8/7.4 に赤・黒粒色	底:36/36	Ⅲ期		内外面:ロクロナデ 底:回転糸切り
10	21	土師器	甕 B	PO4 柱脚上壁	部高:2.40 底径:6.5	良好	中粒砂(多)含有	7.5Y8/2 灰白色	底:24/36	Ⅲ期		外面赤彩、内面黒色 10C前半
11	23	土師器	碗	PO5	口径:[14.5] 部高:[4.0]	やや不良	粗粒砂(中)含有	7.5Y6/2 灰褐色	口:1/36	前期か		外面厚削、内面へろ削り 底:回転糸切り
12	24	須恵器	坏蓋	PO6 胴り方	部高:10.0g		中粒砂(黒色粒)含有	N6/ 灰白色	—	—		内外面:ロクロナデ
13	25	土師器	碗か	PO6 柱脚	部高:40.6g 底径:[4.6]	やや不良	密	2.5Y8/1 灰白色	—	Ⅲ期前半		内外面:ロクロナデ 底:回転糸切り
14	4	須恵器	甕 A	SK02	部高:3.4 底径:[12.4]	卑焼	粗粒砂(少)含有	N5/ 灰色	底:5/36	—		内外面:ロクロナデ、外面へろ削り
15	5	須恵器	甕	SK02	部高:6.7	卑焼	中粒砂(多)含有	N7/ 灰白色	—	—		外面:平行削き、内面同心円当て具焼
16	9	須恵器	坏	SK03	口径:[12.8] 部高:(2.1)	卑焼	密	N6/ 灰色	口:4/36	—		内外面:ロクロナデ
17	8	須恵器	坏 B	SK03、北(東側)	口径:10.5 部高:3.3 底径:7.5	卑焼	中粒砂(多)含有	N7/ 灰白色	底:21/36	Ⅲ期		内外面:ロクロナデ、外面へろ削り後ナデ
18	10	須恵器	鉢か	SK03	口径:[22.3] 部高:(2.7)	卑焼	中粒砂(多)含有	7.5Y4/1 灰色	口:2/36	—		内外面:ロクロナデ、その後外面ハケメ調整か
19	11	須恵器	甕	SK03	部高:2.2	卑焼	中粒砂(多)含有	7.5Y6/1 灰色	—	—		内外面:ロクロナデ
20	12	須恵器	甕	SK03	部径:[20.4] 部高:(6.0)	卑焼	中粒砂(多)含有	5Y6/1 灰色	—	—		外面:平行削き、内面同心円当て具焼
21	27	近世陶器	甕	おちこみ池	現存高:(10.2)	卑焼		表面:5Y8/4 褐色、断面:5Y8/1 灰色	—	近世		胴部か
22	28	須恵器	坏蓋	東側溝内	つまみ径:3.3 つまみみ径:0.8 部高:(0.8)	卑焼	粗粒砂(少)含有	N7/ 灰白色	—	Ⅲ期前半		内外面:ロクロナデ

第3表 古府しのまち遺跡 出土土物観察表

図号 No.	発掘 No.	識別	器種名	出土地点	法量	構成	胎土	色調	残存	時期	調整	備考	
23	29	須恵器	坏A	東側直方 込み現直	頸高(1.3) 底径: 7.8	厚織	5mm以上の内障 含有	7.5Y6/1 灰白色	底: 21/36	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ 底: 刻線へう切り後ナデ		
24	30	須恵器	瓶A	東側直方 込み現直	口径: [11.3] 頸高(5.0)	厚織	細粒砂(黒色粘) 含有	7.5Y7/1 灰白色	口: 3/36	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ	洗滌1条あり	
25	32	須恵器	瓶か	東側	頸高(1.7) 底径: [9.2]	厚織	中粒砂(多)含有	5Y6/1 灰白色	底: 12/36	—		底に工具痕有	
26	33	須恵器	瓶	東側	残存高(3.5)	厚織	4mm以上の内障 含有	7.5Y5/1 灰白色	—	—	内外面: ロクロナデ		
27	35	土師	土罐	東側	全径 6.2 最大幅 3.4 孔径 1.55 重畳 83.9g	良好	粗粒砂(少)含有	2.5Y8/2 灰白色	—	—			
28	54	須恵器	坏蓋	北区東側	口径: [20.8] 頸高(1.5)	厚織	細粒砂(並)含有	N6/ 灰色	口: 2/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ	
29	55	須恵器	坏A	北区東側	口径: [12.3] 頸高(2.5)	厚織	細粒砂(並)含有	N6/ 灰色	口: 4/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ	
30	56	須恵器	碗	北区東側	頸高(1.2)	厚織	3mm程度の内障 含有	5Y7/1 灰白色	底: 9/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ。 底面: へう切り後ナデ	
31	59	須恵器	無台盤A	北区東側	口径: [15.6] 底径 [12.3] 頸高(2.2)	厚織	細粒砂(並)含有	N7/ 灰白色	口: 4/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ。 底面: へう切り後ナデ	
32	60	須恵器	有台盤B	北区東側	底径: [11.8] 頸 高(2.7) 高台0.8	厚織	粗粒砂(白色粘) (並)含有	7.5 Y7/1 灰白色	底: 6/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ。 底面: へう切り後ナデ	
33	48	土師器	有台皿	北区東側	頸高(2.3) 底径: [6.1] 高台高 0.9	良好	粗粒砂(並)赤色 粘含有	10Y88/3 浅黄橙 色	底: 4/36	Ⅲ期分			
34	44	土師器	有台皿	北区東側	頸高(1.8) 底径: 6.0 高台高 0.6	良好	粗粒砂(少)含有	10Y88/2 灰白色	底: 36/36	—	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ	
35	45	土師器	有台皿	北区東側	頸高(1.8) 底径: [6.1] 高台高 0.9	良好	中粒砂(並)含有	10Y88/3 浅黄橙 色	底: 6/36	Ⅲ期分			
36	58	土師器	瓶か	北区東側	口径: [15.0] 頸高 [5.6] 底径: [8.0]	やや不 良	細粒砂(並)含有	2.5 Y8/2 灰黄色	口: 2/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内面: へうミガキ 内面黒色	
37	57	土師器	皿	北区東側	口径: [11.6] 頸高(2.2)	良好	滑	7.5 Y8/6 浅黄橙 色	口: 3/36	Ⅲ期分		外面赤彩	
38	68	須恵器	小皿	北区東側	頸高(1.3) 底径: [4.6]	厚織	細粒砂(並)含有	10Y 88/2 灰白色	底: 12/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	表面磨耗	
39	47	土師器	小皿	北区東側	頸高(1.4) 底径: [5.0]	やや不 良	粗粒砂(少)含有	10Y88/1 灰白色	底: 15/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	底面: 回転糸切りか	
40	62	須恵器	長頸瓶	北区東側	頸径: 7.0	やや不 良	滑	2.5Y8/2 灰白色	—	—	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ 頸部、片障充填後、 穿孔土師胎付け	
41	51	須恵器	瓶A	北区東側	口径: [14.8] 頸高(7.5)	厚織	極粗粒砂(多)含 有	7.5Y7/1 灰白色	—	—	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ	
42	64	須恵器	瓶D	北区東側	最大径: [13.6] 頸高(4.2)	厚織	細粒砂(並)含有	7.5 Y7/1 灰白色	—	—	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ 外面に洗滌2条	
43	65	須恵器	瓶D	北区東側	最大径: [21.1] 頸 高(7.0)	厚織	滑	7.5 Y6/1 灰白色	—	—	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ 肩部のみ残存	
44	66	須恵器	鉢F	北区東側	口径: [17.3] 頸高(4.5)	厚織	細粒砂(並)含有	N7/ 灰白色	口: 4/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ 外面に洗滌2条	
45	67	須恵器	瓶	北区東側	頸高(8.9)	厚織	5mm前後の白色 粘含有	N6/ 灰白色	—	—	Ⅲ期分	Ⅲ期分	頸部: 同穴内当具痕
46	50	土師器	長釜	北区東側	頸高: [1.8]	良好	粗粒砂(少)含有	7.5Y87/4 に赤い 褐色	—	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ 熱艶有	
47	53	陶罐		北区東側	全径 7.37 最大幅 3.33 孔径 1.13 重 畳 88.2g	厚織	滑	N7/ 灰白色	—	—			
48	39	土師器	長釜	北区中央	頸高(2.1)	良好	極粗粒砂(少)含 有	10Y 88/1 灰白色	—	Ⅲ期分			
49	70	土師器	鉢	北区内側	頸高(1.8)	良好	粗粒砂(並)含有	2.5Y7/4	—	Ⅲ期分		熱艶有	
50	71	須恵器	鉢B	北区内側	頸高(5.9)	厚織	細粒砂(並)含有	5Y7/1 灰白色	—	—	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ	
51	37	土師器	皿	北区第一 2層	口径: [13.4] 頸 高: 2.9 底径: [9.8]	やや不 良	滑	5Y8/1 灰白色	底: 10/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ。 底面: へう切り後ナデ	
52	42	土師器	皿	北区	頸高(1.1) 底径: [5.4]	良好	滑	10Y88/2 灰白色	底: 11/36	Ⅲ期分			
53	41	土師器	碗	北区	頸高(2.1) 底径: [5.4]	良好	滑(赤色粘含有)	7.5Y88/4 浅黄橙 色	底: 10/36	Ⅲ期分			
54	43	須恵器	小型瓶	北区	口径: [7.0] 頸 高(2.1)	良好	滑	N6/ 灰白色	口: 3/36	—			
55	40	土師器	かわらけ	北区	口径: [9.5] 頸 高(1.4)	良好	滑	10Y88/2 灰白色	口: 7/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	底面: 回転糸切りか	
56	72	須恵器	坏蓋		口径: [16.1] 頸 高(1.8)	厚織	細粒砂(並)含有	N6/ 灰白色	口: 3/36	Ⅲ期分	Ⅲ期分	内外面: ロクロナデ。 上面: へう削り	
57	1	土師器	高坏	表層	脚部径 10.7 脚部厚 径 4.0 頸高 19.0	良好	極粗粒砂(並)含 有	7.5Y8/4 浅黄橙 色	—	—	Ⅲ期分	外面ケズリ 頸部のみ 古墳後期～古代遺物	
-	26	土師器	長釜	P10	残存高(5.5)	良好			—	—	Ⅲ期分	外面: 平行明き、内面平 行当て具痕	

- ・時期: 田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸: 田嶋明人 1998 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)』を参考として記載している。
- ・法量: 複元値は〔 〕、残存値は() として表記している。

第三章 小松城跡発掘調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

小松市丸内町^{まるのうち}地内の分譲宅地で、造成工事に係る平成28年度発掘調査地に隣接する土地の住宅新築工事が計画され、平成29年11月16日付で建築主より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。

当初は、石垣を残したままでの建築計画が検討されたが、石垣を取り除かなければ柱状改良工事ができない問題は解決されず、発掘調査で対応することになった。平成29年11月27日付で、土木工事等のための発掘届、発掘調査依頼が提出された。

2 調査の経過

着手は12月4日、造成土の搬出から始まった。12月7日より作業員が入るが、季節的に天候不順であり、かつ梯川沿いの砂地のために川の水位まで水が湧き出すという悪条件が重なり、作業が難航した。

着手早々、狭い調査地に造成土の砂が流入するのを防止する対策が必要になる。シートで養生しても、雨水がその下を流れて砂の流入が止まらない。試行錯誤の末、シートの端に全周溝を掘り、埋めて固定する方法で大幅に改善できた。

雨天日と降雪日、週休日を挟んで5日間の作業で、石垣の残存部分を掘り出し、12月15日に空中写真撮影をし、同日に堀の断面図作成等の補足作業を行ない、現地調査を完了とした。その後、天候を見ながら12月22日までに埋め戻しを完了し、現地を建築主に引き渡した。

空中写真は図化するために業務委託で撮影したもののだが、撮影時期が12月だったこと、発掘調査費用が予算段階での想定の2倍近くに膨らんだことから、年度を改めて予算措置することとし、図化業務は令和元年度に実施した。

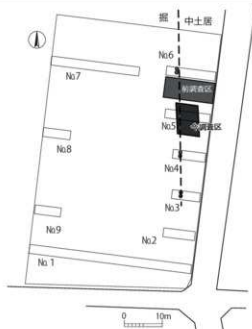
第2節 遺構と遺物

今調査では出土遺物はなく、石垣の残存部分とその内側の栗石を検出したのみであった。

石垣は、既往の全ての調査結果と小松城の縄張りを重ねて得られる曲輪の想定線と、隣接する前調査の結果から、調査地を南北にやや傾いて一直線に横切ると予想して調査区を設定したのだが、結果的に、調査区内で鉤の手に屈曲することが明らかになった。

石垣の屈曲部は欠損しており、ピンボールを刺しても、石や桐木などに当たらなかった。屈曲部に残る最下段の石は掻き出された栗石に覆われ、土層断面にも、堀底の泥に潜り込むように曲輪の砂と栗石が堆積しているのを見ることができる。

屈曲部の工法については、曲輪内に食い込むように石垣を積んで一旦工区を区切り、ここから丁字に継ぎ足している。曲輪内に食い込む部分が地表まで見えていたかとは分からない。中土居の調査は今回で3回目だが、石垣は下から2段分までしか残っていない点で共通している。



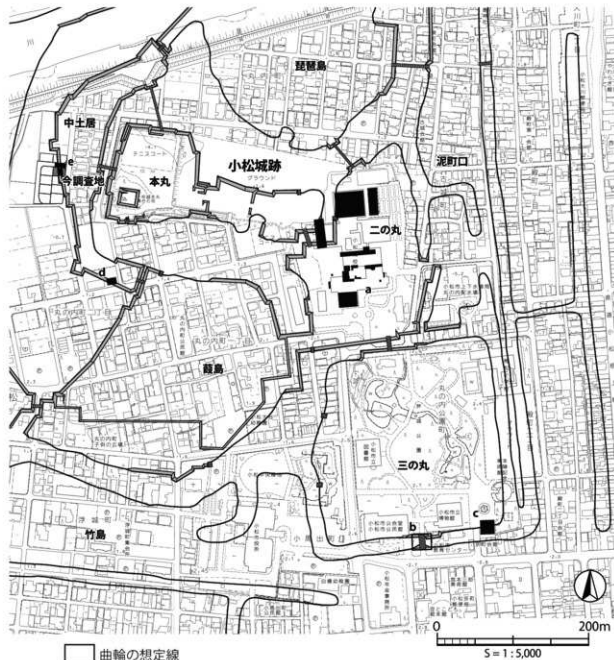
第11図 丸内町試掘調査位置図 (5=1:1,000)

第3節 まとめ

中土居は、前田利常の隠居城として新たに縄張りし、本丸を囲む曲輪のひとつとして拡張整備された。主に土蔵が置かれていた様子が絵図に残っている。

明治6年1月に政府が布告通達した「城郭存廃決定」に小松城の名は挙がらなかったが、これに先行して、石川県がすでに城の取り壊しと耕地化の計画について所管の大蔵省と調整しつつ着手しており、廃城は既定事項となっていた。

中土居の外側の堀は「白鳥堀」といい、堀の中では最も幅が広く、明治20年10月測量の地形図



小松市埋文センター (2016) 第1図を改変・更新

- a. 発掘調査 (H11 ~ 16) 調査主体：石川県
- c. 発掘調査 (H21) 調査主体：小松市
- e. 発掘調査 (H28) 調査主体：小松市

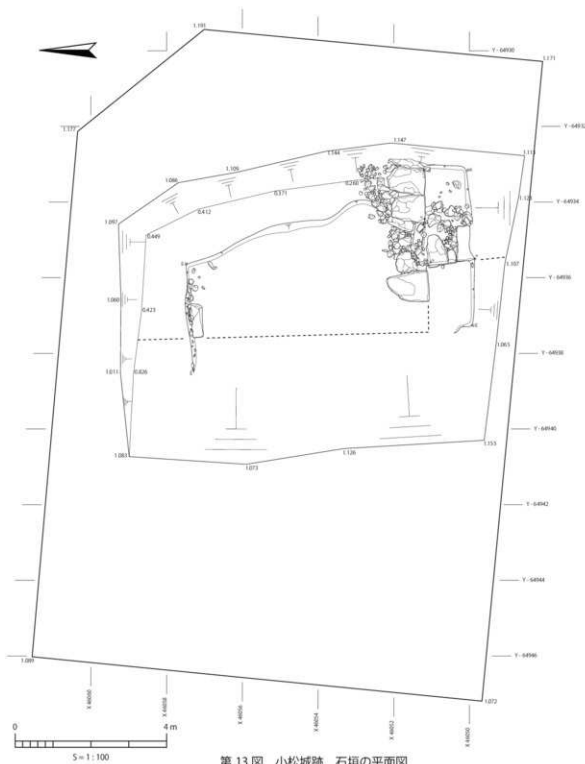
- b. 工事立会い調査 (H20) 調査主体：小松市
- d. 発掘調査 (H24) 調査主体：小松市

第12図 小松城跡 調査履歴図

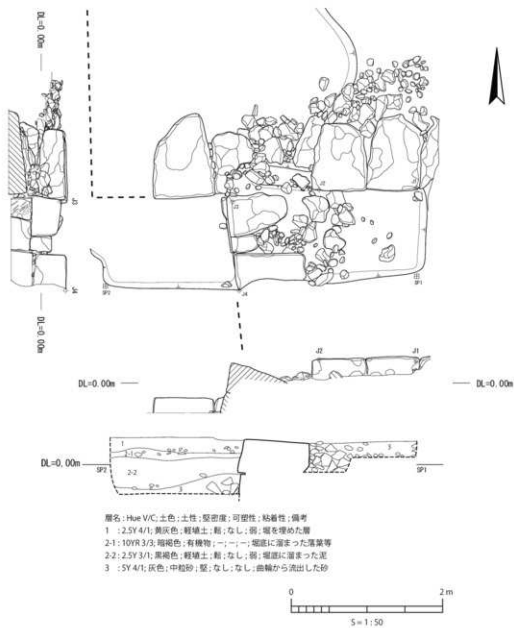
が作成された段階でまだ埋立てられていない様子だが、明治33年4月払下げの段階では、「白鳥堀ノ部」として公園に記載されている。中土居に当たる字名は「中島ノ部」である。

埋蔵文化財包蔵地としての「小松城跡」は民間に払い下げられなかった範囲に限り、城郭の遺構の大部分は失われたままであった。

平成11年度の県立小松高等学校改築工事に係る発掘調査を皮切りに、小松城跡の調査は、今調査で通算8回目（小松市調査は4回目）を数える。断片的ながら、絵図からある程度の精度で縄張りや地図上に再現できるものの、今調査における屈曲部の検出は、ディテールの修正がまだまだ必要なことが示されたといえよう。



第13図 小松城跡 石垣の平面図



第 14 図 小松城跡 石垣・堀の立面図及び断面図

参考文献

- 市史編集委員会 1999『新修小松市史』資料編 1 小松城
 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2007『小松市 小松城跡』
 小松市教育委員会 2011『小松城跡発掘調査報告書』
 小松市教育委員会 2015『第三章 小松城跡発掘調査』『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』
 小松市埋蔵文化財センター 2016『小松城跡発掘調査報告書 II』
 三浦純夫 2020『第八章 第一節 小松城と城下町』『新修小松市史』資料編 17 考古 市史編集委員会

第四章 本折城跡発掘調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

小松市上本折町地内での住宅新築計画について、平成30年3月13日付けで個人（以下、依頼主）より埋蔵文化財の取り扱い協議を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「本折城跡」の範囲に含まれており、なおかつ依頼主とは別の事業者から協議を受け、すでに試掘調査を実施していた区域であった。試掘調査は前年12月22日に実施し、区域内に設定した試掘坑から埋蔵文化財が確認されていた。この結果を以って、同日付けで依頼主に適切な保護措置が必要な旨を通知した。

協議の結果、計画された地盤改良工事が地下の埋蔵文化財に影響を与えるものと判断されたため、発掘調査による記録保存で合意。文化財保護法第93条に基づく発掘届の提出を受けるとともに、協定書を交換して4月10日に発掘調査に着手した。

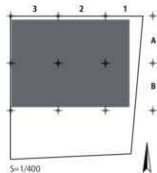
2 調査の方法

調査は隣地境界杭を利用して、5m間隔のグリッドを設定した。平面図及びセクションポイントは、4級基準点測量及び3級水準測量成果に基づき光波測距儀で得られた座標を用いて、必要に応じて40分の1、20分の1に図化した。土坑番号は既報告（小松市教委2015）からの通し番号に倣った。

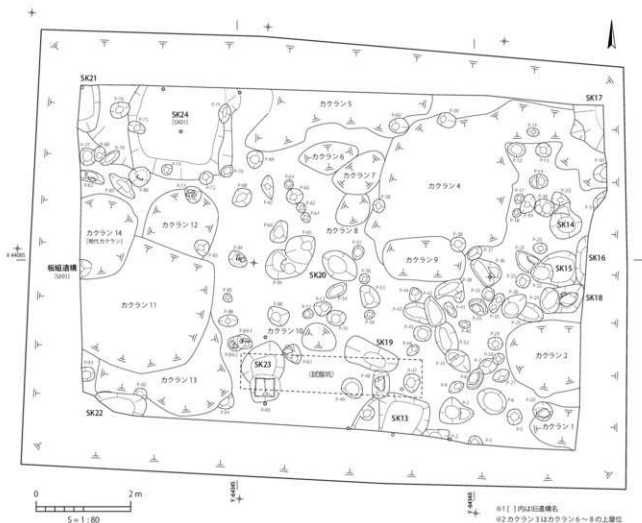
3 調査の経過

4月10日～11日に表土除去、4月12日にグリッド設定等現場整備を行い、4月13日より包含層掘削及び遺構精査を開始した。その際、調査区周辺に廃土置き場が少なく、グリッドに合わせて大きく3ブロックに分けて遺構の精査・掘削を行い、必要に応じてセクション図を作成した。4月22日より掘削と並行して平面図作成を開始、4月29日には人力での掘削・図化作業を完了した。

4月30日に重機による埋め戻しと現場からの撤収作業を終えた。 第15図 本折城跡 グリッド配点図



第16図 本折城跡 調査地位置図



第17図 本折城跡 平面図

第2節 層位の所見

現況面から約60～80cm下までは現代の造成土に覆われ、さらにその下に焼土や炭化物を多く含む遺物包含層が厚く堆積していた。この包含層はオリーブ色系の土色を呈し、近世・近代を主体として中世以前の遺物も混ざる。遺構検出面で多く認められた攪乱（個別表記はカタカナ）は包含層由来の覆土で、なおかつ黒色系の遺構覆土をもつSK13以外は、ほとんどの遺構でこの攪乱土が混ざったような覆土が確認された。これらの状況は、近世・近代以降にそれより古い中世以前の遺構が大きく削平・攪乱を受けていることを示すものである。調査区西壁セクション（第19図）からも、そうした状況が読み取れる。なお既往の調査（小松市埋文2015）により、本遺跡の属する主な時期は中世後期～近世成立期であることが明らかになっている。

以上を踏まえ、攪乱はオリーブ色系の覆土とともに掘り方が一定でなく不明瞭なものや、出土遺物が近世以降に偏るものを主な認定基準とした。遺構としたものは、黒色系の覆土をもつSK13のほか、掘り方がある程度明瞭で覆土が均質であることや出土遺物に中世以前のものが一定量含まれることを目安とした。中でも、遺構下層位にややまとまって中世遺物が検出されたSK24等は、削平・攪乱を免れてわずかに残存したものと推測される。

第3節 遺構と遺物

1 遺構 (第19図)

近接する幸町遺跡報告(小松市教委2005)を一部参照しながら分類した。

(1) 廃棄土坑 [SK14～16・19～24]

相対的に浅いものが多く、上位層と覆土層が遷移的なもの。大型のSK24とそれ以外の中小型のものに分けられる。大型のSK24は前述したとおり下層位に中世の遺物がまともっており、15世紀後半～16世紀前半頃の土師器皿(第21図8～12)や越前甕(第23図48)に石鉢(第26図105)・石臼(第28図117)が伴う。上位層と覆土層はセクションでは遷移的であったが、界面に集石があり、ここで上下に分層した。中小型のものは一部調査区外に広がるため不確定であるが、概ね平面形が楕円形や円形となる。SK19から土師器皿(第21図6・7)や石塔相輪(第27図116)、鍛冶滓が、SK21から天目茶碗(第21図30)、石鉢・行火(第26図104・108)が、SK23から珠洲搦鉢(第22図39)と鍛冶滓が、それぞれ出土している。

(2) 湧水土坑 [SK17]

掘り方が湧水準に達するもの。井戸側は検出されなかった。SK17が該当し、土師器皿(第21図4・5)のほか、鍛冶滓(第30図125～128)が多く出土した。ほかに、攪乱と認定したカクラン11からも湧水がみられた。

(3) 複合ピット [SK13 + P-2]

プラン確認の段階では単独の土坑と思われたが、完掘状態でピットの複合となったもの。SK13とP-2は一部調査区外に出るが、ともに不整な隅丸方形になると推測される。SK13の覆土は均質な黒褐色土で、古瀬戸皿(第21図29)や大型のフイゴ羽口(第30図124)が出土したが、16世紀後半以降の土師器皿(第21図3)や近世以降の遺物(第24図87、ほか未図化の土瓶片等)が混ざり、単純な中世の遺構とは言い難い。

(4) 礎石ピット [SK18、P-30・48・90]

礎石と思われる石材を掘り込み内に据えたもの。SK18、P-30・48は自然礫、P-90は加工した板石(第29図120)が据えられていた。確実に建物となる組み合わせは認められなかった。

(5) 板組遺構

調査区西壁際で辛うじて確認した、掘り込みを伴う横板組の不明遺構。板組は長辺36cm、短辺18cmの平面長方形。わずかな木質と板を固定した釘が残存していた(第18図)。井戸とするにはやや小さすぎる感がある。上面を現代の攪乱(カクラン14)に削られ、4～5段が残存。覆土中からは14世紀前半の越前甕(第23図47)とともに定型化した七輪(第25図92)が出土しているため、近現代まで上部が開口していたと考えられる。

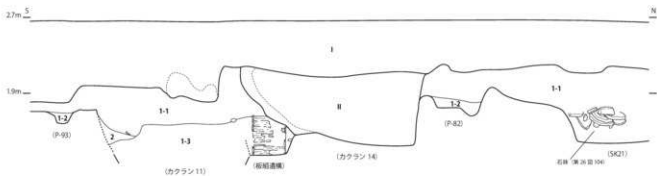
2 遺物 (第20～31図)

遺構外出土を含む遺物の時期は、弥生時代後期から、古代、中世、近世以降に及ぶが、報告は本遺跡が属する主な時期である中世後期から近世成立期(14～16世紀)に主眼を置いた。それより新しい時期の遺物については、一部を除いて省略した。



第18図 本折城跡 板組残存の木質と釘

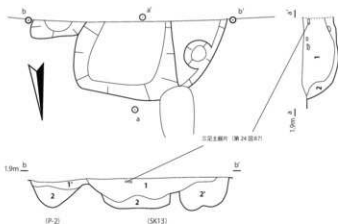
調査区西壁セクション



層名: Hue V/C; 土色・土性: 備考
 I: 2.5Y 5/2 ~ 4/2; 暗灰黄色砂礫土; 現代造成土
 II: 2.5Y 4/2; 暗灰黄色砂; 現代カクラン
 I-1: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; しまりあり, 焼土・炭化物・礫含有
 地山崩あり = 包吉層

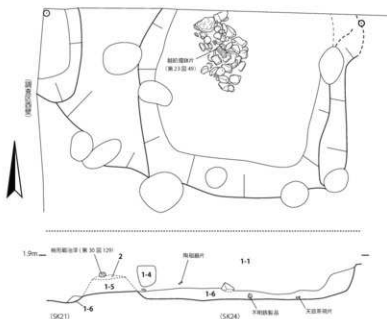
I-2: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; I-1より地山崩極めて多い
 I-3: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; I-1に黄灰色砂 (2.5Y 4/1) 混じる
 2: 2.5Y 5/6; 黄褐色砂; しまりなし, 暗オリーブ色砂 (2.5Y 3/3) が
 斑状に混じる = 地山崩のくずれ?

P-2・SK13



層名: Hue V/C; 土色・土性: 備考
 I: 10YR 3/4; 黒褐色砂; しまりあり, 焼土・炭化物少量, 遺物含有
 I': 10YR 3/4; 黒褐色砂; Iよりやや明るい色調, 焼土・炭化物なし, 遺物なし
 2: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ褐色砂; しまりあり, 地山崩あり
 2': 2.5Y 3/3; 暗オリーブ褐色砂; 2より地山崩少なくやや暗い色調, 炭化物極少量

SK21・SK24 [SK01]



層名: Hue V/C; 土色・土性: 備考
 I-1: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; 調査区西壁セクションに同じ
 I-4: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; I-1より焼土極めて多い
 I-5: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; 焼土なし, I-1より炭化物少なく
 地山崩多い
 I-6: 2.5Y 3/3; 暗オリーブ色砂; I-1に黄灰色砂 (2.5Y 4/1) 混じる,
 I-1より焼土少なく地山崩多い, 遺物含有
 2: 2.5Y 5/6; 黄褐色砂; しまりなし, 暗オリーブ色砂 (2.5Y 3/3) が
 斑状に混じる = 地山崩のはりつき?

※地山: 2.5Y 5/6 ~ 4/3; 黄褐色～オリーブ褐色砂; しまり弱い,
 粒径が比較的均質な細砂



第19図 本折城跡 遺構実測図

(1) 弥生時代後期の遺物 (1・2)

1は甕(鍋)、2は壺の胴部片。1は器面調整から当該期の所産と推測され、2も同時期あるいはその前後する時期と思われる。

(2) 古代の遺物

須恵器片を3点確認。いずれも小片で器種器形は不明。

(3) 中世の遺物 (3～86)**土師器 (3～23)**

手捏ねの土師器皿(かわらけ)で、周辺の調査成果同様、大まかに京都系(薄手・粘土質)と在地系(厚手・砂粒含有)に分けられる。京都系(8・9)の端部調整や見込み処理、ほか在地系の口縁が強く外反する器形は15世紀後半～16世紀前半頃に中心があると推測される。一方、3・5・13は京都系の範疇だが、口縁端部摘み上げや幅のやや狭い口縁一条ナデの状況から16世紀後半以降と考えられる。12の把手付き器形は16～17世紀にかけて存在するが、共存する土師器皿の特徴から16世紀前半代とみたい。

陶磁器 (24～38)

青磁 (24～28) 24と25は稜花皿、27と28は細描きの蓮弁文碗で、15世紀後半～16世紀初頭の年代観を有する。

古瀬戸/瀬戸・美濃 (30～38) 30は天目茶碗、31～38は灰釉の碗皿類で、古瀬戸後期後半から大窯前半期(15世紀中頃～16世紀前半)の所産と考えられる。

炆器 (39～80)

珠洲 (39～46) 42～45は甕、39～41は播鉢で、口縁の特徴から珠洲IV期以降が中心。

越前/瓷器 (47～80) 47・48・51～61は甕、50は壺、49・63・64は播鉢で、特に甕口縁は越前皿・I期からV・3期の変遷が追える。

瓦質土器 (81～86)

燻しが良好な一群(81～84)と土師質の一群(85・86)がある。前者はつくりがシャープで、81は風炉の直立口縁・雷文、82と83は火鉢あるいは風炉の内湾口縁・重菱形文で同一個体となる。84は火鉢あるいは風炉の三脚が付く底部で、81もしくは82・83と同一である。これらはおおよそ14世紀末～15世紀後半頃の所産と考えられる。後者については前者よりも後出するもので、85は浅鉢形あるいは深鉢形、86は三足の小型鉢形となり、いずれも下向きの半花文をもつ。86は海綿骨針を含む胎土で、在地産の可能性がある。

(4) 近世以降の遺物 (87～92)

遺物の大半を省略したが、遺構に伴うものや残存率の高いものを抽出した。87は三足の鉢と思われ、土器、88は徳利、89はサヤ、90は市内の大川遺跡にも類例がある19世紀の片口鉢、91は土鍾、92は近代に定型化した珪藻土製の七輪。ほか多くの陶磁器類が出土している。

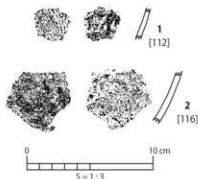
(5) 石製品 (93～120)

硯 (93・94) 大(94)と小(93)の2種がある。

砥石 (95～102) おおよそ粗砥石(99)、中砥石(95～98、100)、仕上げ砥石(101・102)に分けられ、被熱するものもある。99は行火の転用品。

火打ち石 (103) 石英質の石材で、全体に敲打痕や傷があり、火打ち石と判断した。図正面の溝状の傷は、火打ち金を擦った痕跡かもしれない。

石鉢 (104～107) 把手付き(104・105)や三脚のもの(104・107)がある。104はほぼ完形

弥生土器 (遺構内)

第20図 本折城跡 遺物実測図1

で出土しており、外側面から内側面上半は表面滑らかに研磨され、内側面下半から内底面及び外底面に工具痕が顕著に残る。内底面中央付近はやや摩滅しており、使用痕の可能性はある。106 は内底面が摩滅するとともに、内面から破面、外側面上端にかけて被熱している。鉢として使用した後、破損して残存した底部を火鉢に転用したものか。

行火 (108～115) 108・112 は前方開口のⅠ種、113・114 は上方開口で平面D字形のⅡ種a類、115 は上方開口で平面O字形のⅡ種b類、110 と 111 はⅡ種の蓋である (垣内 1990 分類による)。Ⅰ種は 14 世紀末頃から、Ⅱ種は 15 世紀中頃～16 世紀前半に使用が始まり、16 世紀後半以降はⅡ種b類が現代まで続くと考えられる。いずれも被熱を受ける。

相輪 (116) 石塔相輪の請花部分の破片で、いわゆる「加賀型宝塔」か。

石臼 (117・118) いずれも粉挽き臼で、117 は下臼、118 は横打ち込み式の上臼である。

管状 (119) 口が開く管状の製品で、用途は不明。

板状 (120) P.90 の底面に敷かれていた正方形に近い重厚な板状の製品。左の図面が出土上面で、表面が滑らかに研磨され、中央右寄りに未貫通のホゾ穴がある。一方、右の下面には工具痕が顕著に残るが、縁の一部が研磨される。図面上辺の側面は一部張り出して凸縁状となり、刻み目が入る。図面下辺の側面は横方向に強く研磨されて凹む。中央付近に加重がかかった痕跡が平面や断面から観察されたため、礎石と判断したが、元々は別の用途で用いられた製品を転用したものかもしれない。

以上のうち、石鉢、行火、相輪、石臼、管状・板状製品には、地元産凝灰角礫岩系の石材が使用されている。中でも、104 の石鉢は赤穂谷石の可能性はある。

(6) 鉄製品 (121～123)

121・122 は包丁、123 は刃物柄の可能性があるので、包丁は近世以降の所産と考えられる。

(7) 鍛冶関連遺物 (124～139)

124 は炉壁付きの大型フイゴ羽口。125～139 は梃形鍛冶滓。鍛冶滓は磁着度の大きい確実な含鉄品を分類対象とした (重量計 6,458.1g)。これらのほかは分類対象外としたが、磁着度が非常に小さく非含鉄品と判断した鍛冶滓 (重量計 3,300.2g) や、釘・器種不明品を含む鉄製品 (重量計 764.0g) が出土している。

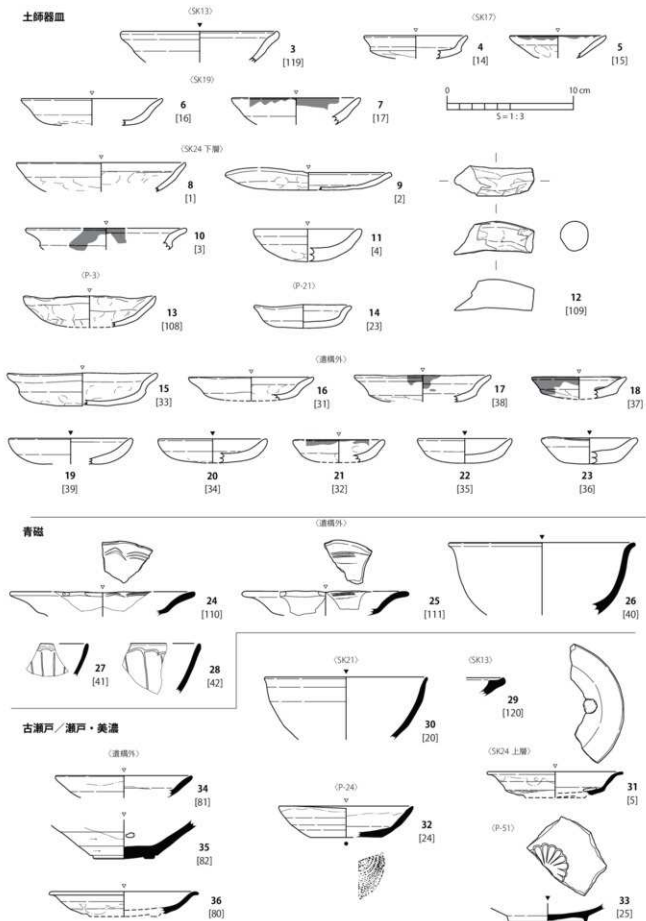
(8) 銭貨 (140～148)

140・141 は北宋銭で、140 は皇宋通寶、141 は政和通寶。ほか判別できるものは寛永通寶が大半を占める。147 は 2 枚が重なり合う。148 は昭和 19 年発行の十銭アルミ青銅貨。

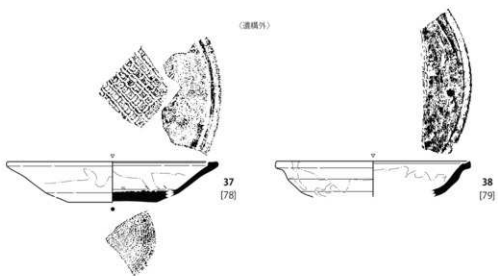
第 4 節 まとめ

今調査地では、中世城跡跡に関する遺構は検出されなかったが、多数の中世遺物が出土した。時期は既往の調査と同じく、14 世紀に始まり、15 世紀後半～16 世紀に集中するようである。遺物の中でも、特に瓦質土器の風炉は城館に住まう支配階級の存在をうかがわせるものとして着目される。瓦質土器自体も、他の器種と合わせると最低でも 4 個体 (既往調査と合わせて 5 個体) と、調査面積に比して多く出土している。また、石塔相輪は近代庭園に転用される場合もあるが、支配階級の墓標や供養塔に関連づけられるかもしれない。

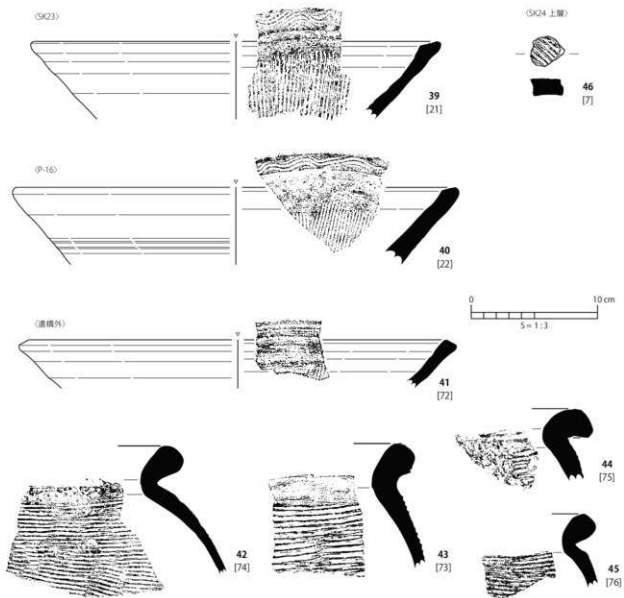
なお、大半を割愛したが近世以降も遺物は多く、土地利用も活発であったと判断され、今調査地が北国街道沿いであることに起因すると考えられる。



第21図 本折城跡 遺物実測図2

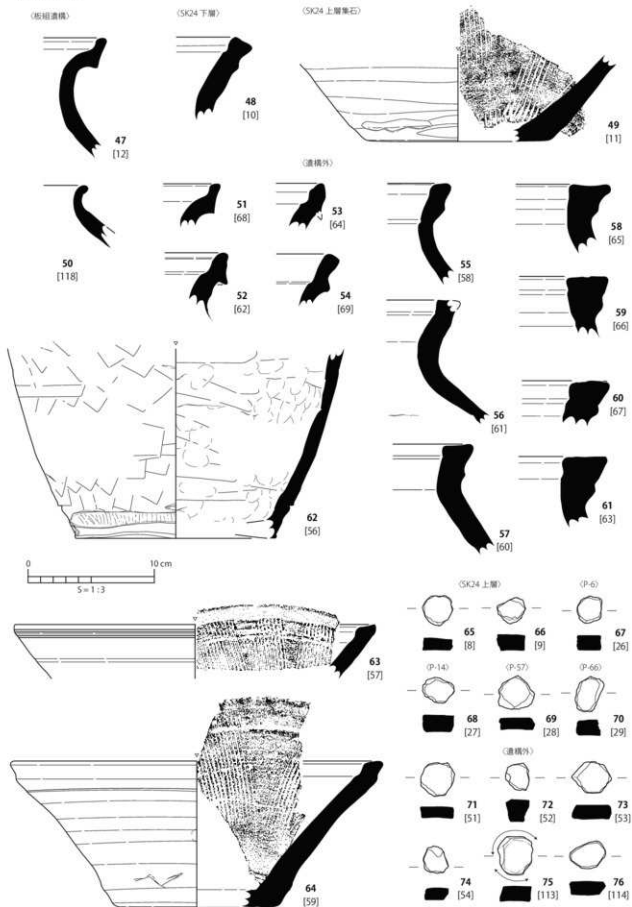


珠洲

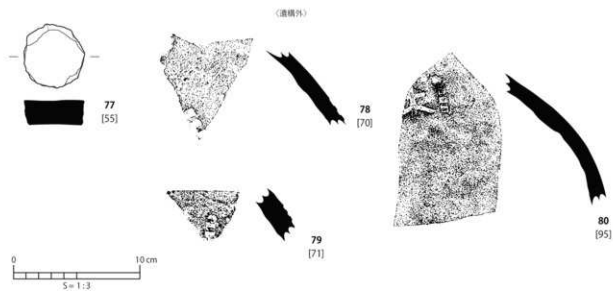


第 22 図 本折城跡 遺物実測図 3

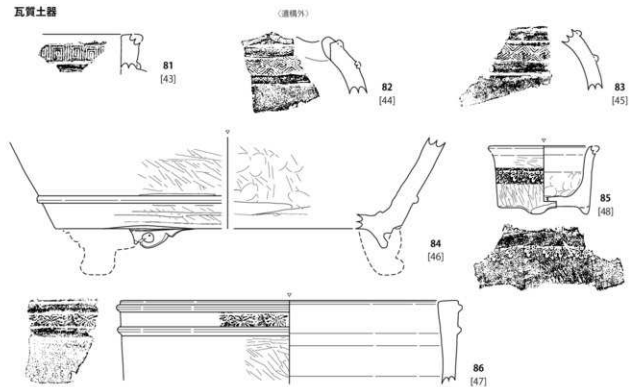
越前/瓷器系



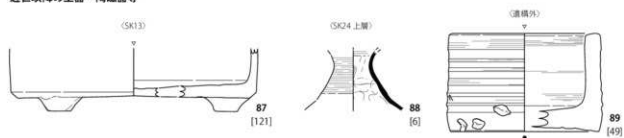
第 23 図 本折城跡 遺物実測図 4



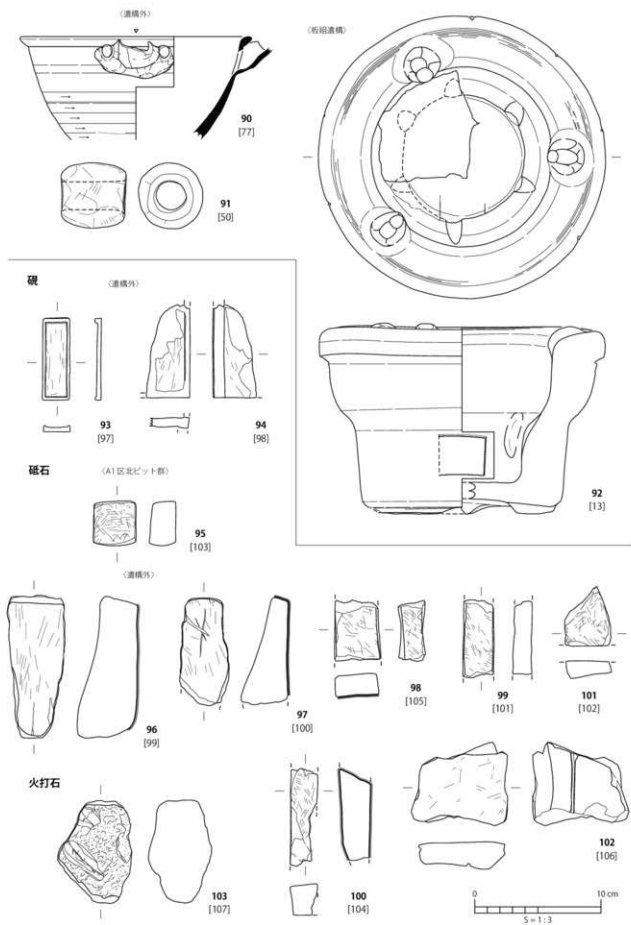
瓦質土器



近世以降の土器・陶磁器等



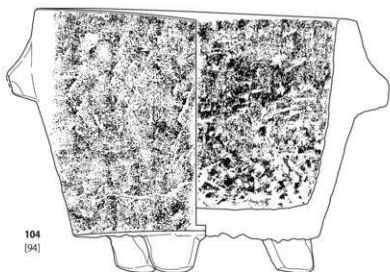
第24図 本折城跡 遺物実測図5



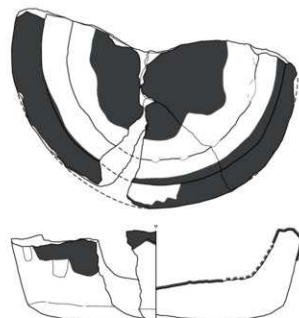
第25図 本折城跡 遺物実測図6

石鉢

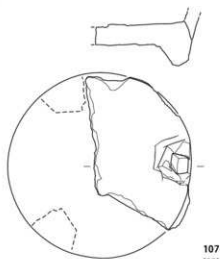
(SQ1)



(SQ4 下面)

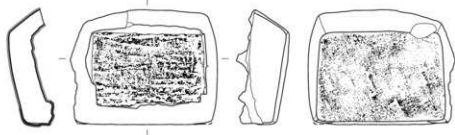


(遺構外)

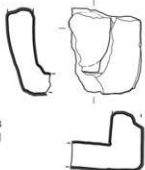


行火

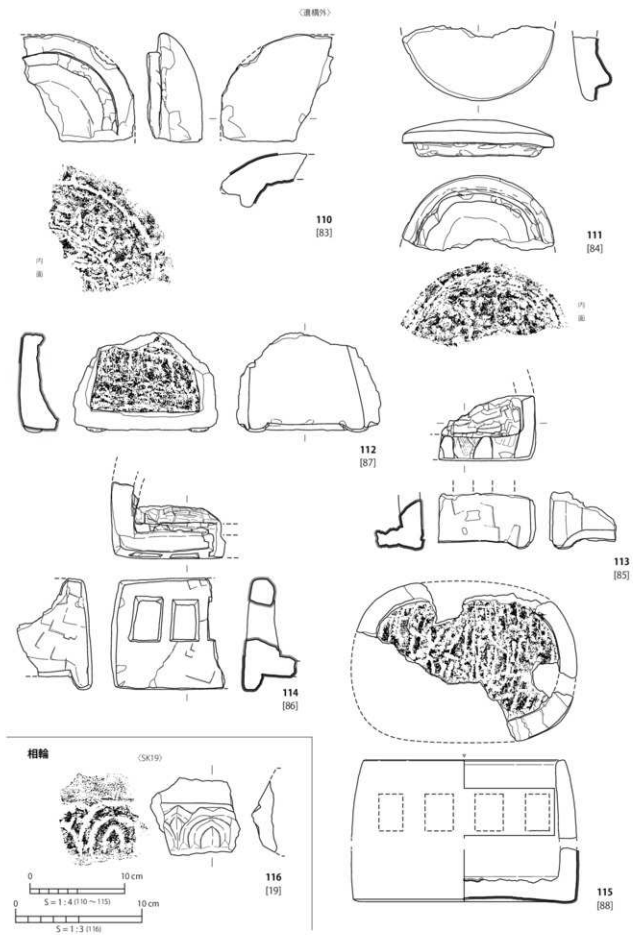
(SQ1)



(P-88)

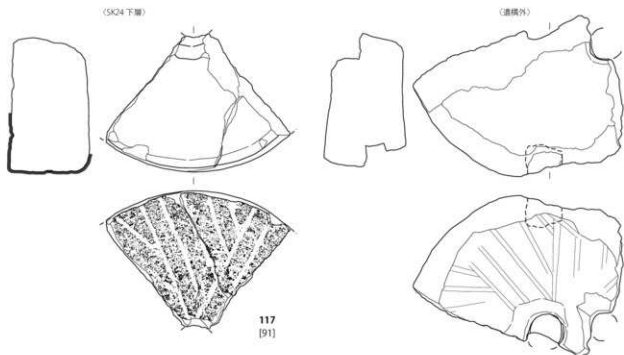


第 26 図 本折城跡 遺物実測図 7

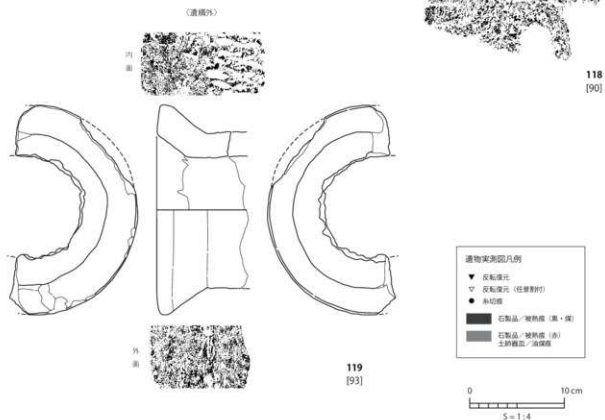


第 27 図 本折城跡 遺物実測図 8

石臼



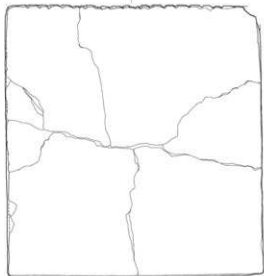
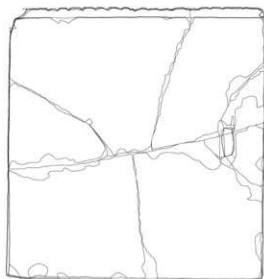
管状製品



第 28 図 本折城跡 遺物実測図 9

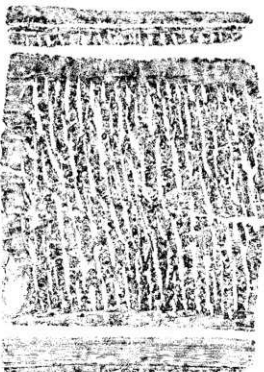
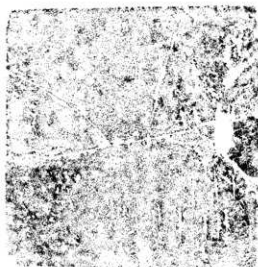
板状製品

(P.90)



0 10 cm
5 = 1 : 6 (1/20)

120
[96]



鉄製品

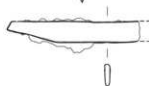
(透視外)



121
[122]



122
[123]

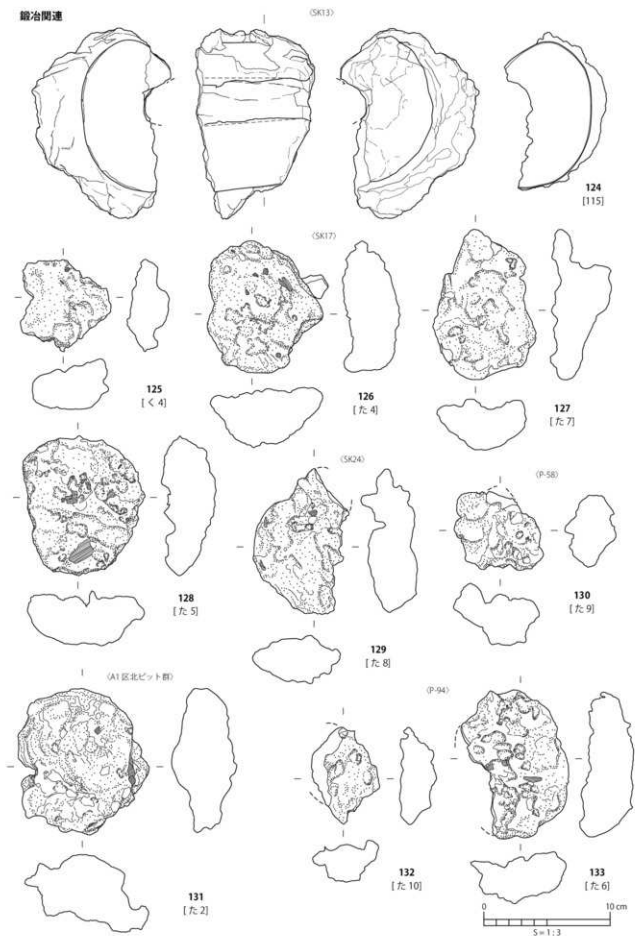


123
[124]

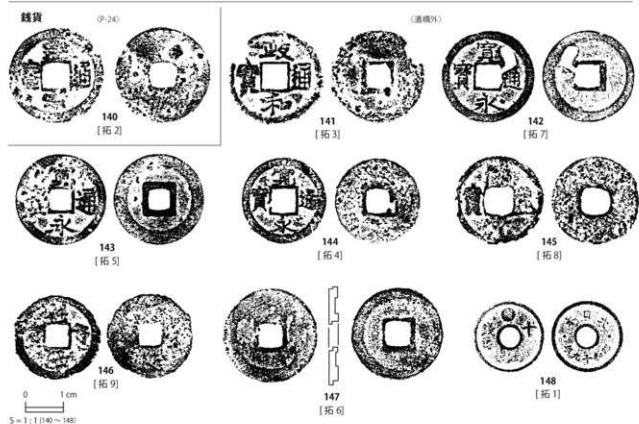
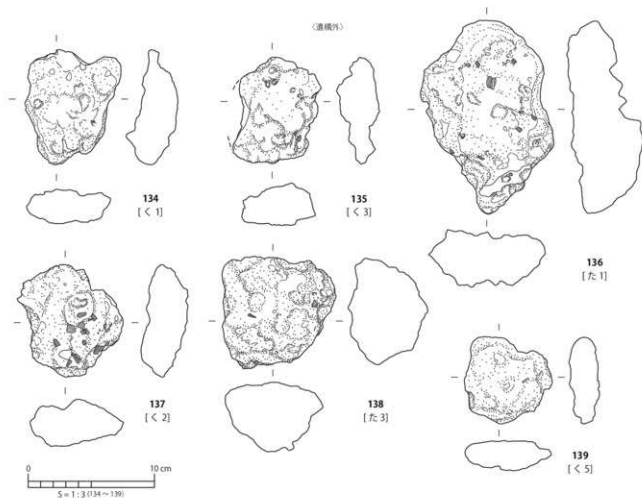
0 10 cm
5 = 1 : 3 (1/21 ~ 1/28)

第29図 本折城跡 遺物実測図 10

縁沿関連



第30図 本折城跡 遺物実測図11



第 31 図 本折城跡 遺物実測図 12

第4表 本折城跡 遺物観察表

順號	発見	整理	出土位置	分類	形状	寸法 (長さ×幅×高さ)	種別	表面色調	断面色調	備考
1	112		カクラン11	弥生土器	腰形		内 N/5、外 10YR8/4	2.5Y6/1	後期、内面土質	
2	116		表土・盛土	弥生土器	筒形		内 2.5Y6/1、外 10YR8/4	2.5Y7/1	外面ミガキ	
3	119		SK13	土師器	皿	□12.2	2.5Y8/1	2.5Y8/1	京都高、16c?	
4	14		SK17	土師器	皿	□1.8	4 10YR6/2	10YR7/3	在地位	
5	15		SK17	土師器	皿	□17.6	8 2.5Y8/3	2.5Y8/3	京都高、津渡堀	
6	16		SK19	土師器	皿	□11.1	7 5YR7/6	5YR7/6	在地位	
7	17		SK19	土師器	皿	□10.1	6 5YR7/6	5YR7/6	在地位、津渡堀	
8	1		SK24 上層	土師器	皿	□13.3	7 10YR8/3	10YR8/3	京都高、15c 後、16c 前	
9	2		SK24 下層	土師器	皿	□13、高 1.8	4 2.5Y8/3	2.5Y8/3	京都高、15c 後、16c 前	
10	3		SK24 下層	土師器	皿	□12.6	2 7.5YR8/3	7.5YR8/3	在地位	
11	4		SK24 下層	土師器	皿	□18.4、高 2.6	2 2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地位、津渡堀	
12	109		SK24 下層	土師器	皿(肥子)		10YR8/2	2.5Y8/2	在地位、16c	
13	108		P2	土師器	皿	□10.4	12 7.5YR8/6	2.5Y8/2	近江(17c)	
14	23		P21	土師器	皿	□17.6、高 1.9	24 10YR8/4	10YR8/4	在地位	
15	33		B3 区 高タナワリ	土師器	皿	□11.7、高 2.6	9 7.5YR7/3	10YR8/3	在地位	
16	31		A1-3 区 高タナワリ	土師器	皿	□19.8、高 1.9	6 7.5YR8/6	10YR8/3	在地位	
17	38		表土・盛土	土師器	皿	□10.8	11 2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地位、津渡堀	
18	37		積石	土師器	皿	□17.4	7 2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地位、津渡堀	
19	39		表土・盛土	土師器	皿	□10.6	8 10YR8/6	10YR8/6	在地位	
20	34		カクラン13	土師器	皿	□8.5、高 1.9	5 5YR7/6	7.5YR8/4	在地位	
21	32		A2 区積石	土師器	皿	□7.3、高 1.8	18 10YR8/3	10YR8/3	在地位、津渡堀	
22	35		積石	土師器	皿	□17.4、高 2	6 2.5Y8/4	2.5Y8/4	在地位	
23	36		積石	土師器	皿	□7.3、高 2	6 7.5YR7/6	7.5YR7/6	在地位	
24	110		A3 区筒	陶磁器	桃花皿	□14.5	3 輪 10Y6/1	N/7	青磁、15c 後	
25	111		表土・盛土	陶磁器	桃花皿	□12.7	4 輪 7.5Y7/1	N/7	青磁、15c 後	
26	40		A2 区積石	陶磁器	碗	□14.6	6 輪 10Y6/2	N/8	青磁	
27	41		B1 区積石	陶磁器	碗		輪 7.5Y6/1	N/7	青磁、継指き透孔文、15c 末、16c 初	
28	42		積石	陶磁器	碗		輪 10Y3/2	N/7	青磁、継指き透孔文、15c 末、16c 初	
29	120		SK13	陶磁器	折鉢皿		輪 2.5Y7/4	10YR8/4	古瀬戸、後期	
30	20		SK21	陶磁器	大口茶碗	□12.8	3 7.5YR4/4	10YR6/1	古瀬戸?	
31	5		SK24 上層	陶磁器	柳形皿	□10.7	13 輪 7.5Y7/2	2.5Y8/2	古瀬戸、後期前、15c 後、鉢み皿	
32	24		P24	陶磁器	縁輪小皿	□10.6、高 2.5、高 2.5	11 2.5Y8/3	2.5Y8/3	古瀬戸、後期、15c	
33	25		P51	陶磁器	皿	径 6.2	付 13 輪 7.5Y6/3	2.5Y8/2	瀬戸・美濃、足込み菊文花	
34	81		A1-B1 区筒	陶磁器	縁輪小皿	□10.7	3 2.5Y6/1	N/6	古瀬戸?	
35	82		カクラン4	陶磁器	平碗	径 4.9	付 14 10YR7/3	10YR8/3	古瀬戸?	
36	80		カクラン13	陶磁器	飯碗	□11.6	4 2.5Y8/1	2.5Y7/1	瀬戸・美濃	
37	78		カクラン13	陶磁器	飯碗	□16.5、高 3.2	7 10YR7/1	7.5YR7/1	古瀬戸、後中期、15c 中、後	
38	79		B2 区積石	陶磁器	柳皿	□15.3	9 2.5Y8/3	2.5Y7/3	古瀬戸、後中期、15c 中、後	
39	21		SK23	瓦器	椀鉢	□131.9	2 N/5	N/5	珠洲、V 期、14c 後、15c 前	
40	22		P16	瓦器	椀鉢	□134.8	4 N/5	N/6	珠洲、V 期、14c 後、15c 前	
41	72		カクラン12	瓦器	椀鉢	□133.3	2 N/5	N/6	珠洲、V 期、14c 前、中	
42	74		A2-3 区積石	瓦器	椀		N/5	N/6	珠洲、V 期、13c 後、14c 中	
43	73		A2 区積石	瓦器	椀		5PB5/1	5PB7/1	珠洲、V 期、14c 前、中	
44	75		カクラン2	瓦器	椀		N/5	N/6	珠洲、V 期、14c 後、15c 前	
45	76		カクラン13	瓦器	椀		N/5	5YR5/2	珠洲、V 期、14c 後、15c 後	
46	7		SK24 上層	瓦器	陶片	長 2.71、幅 2.28、厚 1.35	N/6	2.5Y7/1	珠洲	
47	12		板垣遺構	瓦器	椀		2.5YR4/6	N/5	椀前、皿-1 期、14c 前、2 次焼物	
48	10		SK24 下層	瓦器	椀		5YR4/3	2.5Y7/1	椀前、V-3 期、15c 後	
49	11		SK24 上層集石	瓦器	椀鉢	径 14.5	5YR7/8	5YR7/8	椀前	
50	118		積石	瓦器	椀		5YR5/4	5YR7/6	椀前	
51	68		カクラン11	瓦器	椀		7.5YR5/2	7.5YR4/1	椀前、皿-1 期、14c 前	
52	62		カクラン4	瓦器	椀		5YR4/2	5YR5/1	椀前、皿-2 期、14c 中	
53	64		カクラン3	瓦器	椀		10YR5/4	2.5Y7/1	椀前、皿-3 期、14c 後	
54	69		カクラン11	瓦器	椀		5YR5/6	10YR6/1	椀前、V-1 期、15c 前	
55	38		B3 区 EW アゼ筒	瓦器	椀		2.5YR4/4	7.5YR4/1	椀前、V-1 期、16c 前	
56	61		A1 区 高タナワリ + A2 区積石	瓦器	椀		5YR3/6	2.5Y7/1	椀前、V-1 期、16c 前	
57	60		B3 区積石	瓦器	椀		2.5YR6/6	7.5YR7/1	椀前、V-2 期、16c 中、後	
58	65		カクラン11	瓦器	椀		2.5YR3/4	2.5Y7/1	椀前、V-3 期、16c 後	
59	66		カクラン11	瓦器	椀		N/6	2.5Y6/1	椀前、V-3 期、16c 後	
60	67		カクラン11	瓦器	椀		7.5YR3/1	2.5Y6/1	椀前、V-3 期、16c 後	
61	63		カクラン3	瓦器	椀		N/7	7.5YR7/1	椀前、V-3 期、16c 後	
62	56		A3 区積石 + B2 区積石 + B3 区 EW アゼ筒	瓦器	椀	径 15.9	径 11 内 2.5YR3/2、外 5PB7/1	2.5Y6/1	炭源系	
63	57		B3 区 EW アゼ筒 + カクラン11	瓦器	椀鉢	□128.4	5 5YR7/6	7.5YR7/4	椀前、V-3 期、16c 後	
64	59		カクラン11	瓦器	椀鉢	□129.1、径 12.5、高 11.6	3 2.5Y8/3	2.5Y8/2	椀前、V-3 期、16c 後	
65	8		SK24 上層	瓦器	陶片	長 2.39、幅 2.36、厚 1.08	7.5YR5/1	2.5Y5/1	炭源系	
66	9		SK24 上層	瓦器	陶片	長 2.29、幅 2.08、厚 1.34	5YR6/8	10YR6/1	炭源系	
67	26		P6	瓦器	陶片	長 2.18、幅 1.93、厚 1.23	5YR6/6	10YR4/1	炭源系	

図録	実測	整理	出土位置	分類	形状	寸法(長さcm・厚さg)	重 /容	表面色調	断面色調	備考
68	27	P14	北端	陶片	陶片	長2.40, 幅2.01, 厚1.43		5YR3/2	7.5YR8/4 +2.5Y6/1	炭黒系
69	28	P57	北端	陶片	陶片	長2.84, 幅2.72, 厚1.1		5Y4/3	N/5	炭黒系
70	29	P66	北端	陶片	陶片	長2.79, 幅2.2, 厚1.32		2.5YR6/6	10YR7/6	炭黒系
71	51	カクタン11	北端	陶片	陶片	長2.65, 幅2.62, 厚0.85		5YR4/6	N/7	炭黒系
72	52	カクタン11	北端	陶片	陶片	長2.18, 幅1.88, 厚1.75		5YR4/6	10YR6/1	炭黒系
73	53	カクタン11	北端	陶片	陶片	長3.14, 幅2.53, 厚1.2		2.5YR3/3	N/6	炭黒系
74	54	カクタン11	北端	陶片	陶片	長2.16, 幅1.96, 厚1.1		5YR4/6	N/8	炭黒系
75	113	カクタン13	北端	陶片	陶片	長3.02, 幅2.83, 厚1.33		内7.5YR5/4, 外輪2.5Y4/3	2.5Y6/1	炭黒系, 顔料研削
76	114	B3区②	北端	陶片	陶片	長2.86, 幅2.13, 厚1.17		5YR4/3	10YR6/1	炭黒系
77	55	表土・遺土	北端	陶片	陶片	長5.02, 幅4.77, 厚2.02		5YR4/3	N/8	炭黒系
78	70	カクタン11	北端					7.5YR4/2	5PB5/1	顔料, 格子文押印
79	71	カクタン11	北端					10YR4/1	N/5	顔料, 格子文押印
80	95	表土・遺土						2.5YR4/3	N/7	顔料, 格子文+「本」, 凹字文押印
81	43	カクタン5	瓦葺土層	磁石				N/4	N/8	片
82	44	カクタン5	瓦葺土層	火鉢・磁石				N/5	5YR/1	非常形文, 実45上同一か
83	45	A2区積倉	瓦葺土層	火鉢・磁石				N/5	5YR/1	非常形文, 実44上同一か
84	46	A2区積倉	瓦葺土層	火鉢・磁石				N/5	N/8	二層, 実43~45よりわずかに同一か
85	48	A2区積倉+A3区積倉	瓦葺土層	小碀(杵打?)	口18.8, 底7.3		7	5YR6/6	10YR5/2	土師製(内縁一部塗布+被熱?), 在胎産? (面取付)。下向き平縁。三足
86	47	A2.3区 北下タワリ	瓦葺土層	浅鉢or深鉢	口26.6		2	7.5YR7/6	2.5Y6/2	
87	121	SK13	土師	三足鉢?				10YR7/4	10YR7/2	直口浅鉢
88	6	SK24上層	陶磁器	椀	径3			輪 10Y3/2	2.5YR4/2	直口浅鉢
89	49	B3区②	土師	サヤ	口11.5, 底11.8, 高7.8		13	5YR4/6	7.5YR7/4	直口浅鉢
90	77	カクタン3	陶磁器	片土師	口18.1		8	輪 10Y3/3	2.5Y7/1	直口浅鉢(19c)
91	50	B3区②	土製品	土師	長5.14, 幅5.2			2.5Y8/2		直口浅鉢
92	13	板垣遺構	土師	七輪	口21, 底15.7, 高15.1		389	内2.5YR7/8, 外10R4/6	N/3	近代, 好土製, 三足, 赤色塗料
93	97	B1区東タワリ	石製品	碓	長6.6, 幅2.62, 厚0.53, 重13					スレート(粘岩質)
94	98	カクタン11	石製品	碓	重33.7					スレート(粘岩質)
95	103	A1区北ビッド部	石製品	碓石	長3.51, 幅3.33, 厚2.12, 重46					シェール(頁岩)
96	99	B2区積倉	石製品	碓石	長11.38, 幅4.51, 厚4.65, 重261					シェール(頁岩), 被熱(赤・黄)
97	100	カクタン11	石製品	碓石	重129.3					砂岩(千枚層状), 被熱(黄)
98	105	B3区②	石製品	碓石	重55					シェール(頁岩), 被熱(黄)
99	101	積倉	石製品	碓石	重28.7					行次飯田, 軒石置層状内縁付
100	104	A3区②	石製品	碓石	重46.6					シェール(頁岩), 被熱(赤・黄)
101	102	カクタン13	石製品	碓石	重25.9					シェール(頁岩)
102	106	カクタン2	石製品	碓石	重150.9					シェルトワ石(千枚層状)
103	107	カクタン11	石製品	火打石	長8.15, 幅5.88, 厚5.14, 重28.9					面白石
104	94	SK21	石製品	石鉢(肥手付)	口33.9, 高28, 重9.600					三層, 軒石置層状内縁付, 赤穂片付?
105	117	SK24下層	石製品	石鉢(肥手付)	重538.1					軒石置層状内縁付
106	89	A3区積倉	石製品	石鉢	重2760					火鉢飯田, 軒石置層状内縁付, 被熱(黄)
107	92	カクタン11下層	石製品	石鉢	重437.6					二層, 軒石置層状内縁付
108	18	SK21	石製品	行次	重627.9					一層, 軒石置層状内縁付, 被熱(赤・黄)
109	30	P88	石製品	行次	重321.4					軒石置層状内縁付, 被熱(黄)
110	83	カクタン11下層	石製品	行次(遺)	重354.9					二層, 軒石置層状内縁付, 被熱(赤・黄)
111	84	A2区②	石製品	行次(遺)	重310.9					二層, 軒石置層状内縁付, 被熱(黄)
112	87	A3区②	石製品	行次	重423.9					一層, 軒石置層状内縁付, 被熱(赤・黄)
113	85	榑土	石製品	行次	重241.5					二層+三層, 軒石置層状内縁付, 被熱(赤・黄)
114	86	表土除去	石製品	行次	重474.4					二層+三層, 軒石置層状内縁付, 被熱(赤・黄)
115	88	カクタン11	石製品	行次	重783.1					二層+三層, 軒石置層状内縁付, 被熱(赤・黄)
116	19	SK10	石製品	石輪	重58.3					軒石置層状内縁付, 被熱?
117	91	SK24下層・B3区②	石製品	石臼(下付)	重2.4127					層状内縁付
118	90	表土除去	石製品	石臼(上付)	重3.250					層付込み式, 層状内縁付
119	93	カクタン11	石製品	甕状	重1.182.1					軒石置層状内縁付
120	96	P90	石製品	板状	長41, 幅43.3, 厚5.6, 重10700					軒石置層状内縁付
121	122	B3区積倉	鉄製品	釘丁	幅2.74, 重58.4					炭田田跡
122	123	カクタン1	鉄製品	釘丁	幅5.92, 重148.6					炭田田跡
123	124	B2区積倉	鉄製品	釘丁	幅1.71, 重28.9					炭田田跡
124	115	SK13	皿(板厚付)		長15.1, 重825.7					メタル度H, 磁石度4
125	タ4	SK17	板石製の浮(赤鉄)		長6.0, 幅7.3, 厚2.9, 重177.9					メタル度H, 磁石度5
126	タ4	SK17	板石製の浮(赤鉄)		長8.9, 幅10.4, 厚4.5, 重489.9					メタル度H, 磁石度5, 土師製片付着
127	タ7	SK17	板石製の浮(赤鉄)		長7.1, 幅11.9, 厚4.4, 重338.6					メタル度H, 磁石度5
128	タ5	SK17	板石製の浮(赤鉄)		長9.3, 幅11.1, 厚4.2, 重431.2					メタル度H, 磁石度2
129	タ8	SK24 sec	板石製の浮(赤鉄)		長6.6, 幅11.5, 厚3.8, 重386.5					メタル度H, 磁石度8
130	タ9	P58	板石製の浮(赤鉄)		長6.7, 幅5.6, 厚4.0, 重208.9					メタル度H, 磁石度6
131	タ2	A1区北ビッド部	板石製の浮(赤鉄)		長9.7, 幅11.4, 厚3.3, 重578.4					メタル度H, 磁石度6
132	タ10	P94	板石製の浮(赤鉄)		長5.2, 幅7.7, 厚2.9, 重104.8					メタル度H, 磁石度7
133	タ6	P94	板石製の浮(赤鉄)		長7.6, 幅11.7, 厚4.0, 重345.6					メタル度H, 磁石度5

編號	実測	発掘	出土位置	分類	器形	寸法 (長さ cm・高さ g)	残/品	表面色調	断面色調	備考
134	く1	10	B3区 EW アゼ包 含層	物形跡治坪(含鉄)		長6.7, 幅9.1, 厚2.8, 重273.3				メタル度社, 磁石度4
135	く3	11	B3区 EW アゼ包 含層	物形跡治坪(含鉄)		長5.8, 幅8.5, 厚3.0, 重266.8				メタル度社, 磁石度4
136	た1	1	表土除去	物形跡治坪(含鉄)		長9.3, 幅15.4, 厚5.6, 重727				メタル度社, 磁石度3
137	く2	9	B2区 精査	物形跡治坪(含鉄)		長7.4, 幅9.9, 厚3.0, 重294.5				メタル度社, 磁石度7
138	た3	3	カクラン11	物形跡治坪(含鉄)		長8.8, 幅8.9, 厚4.3, 重554.1				メタル度社, 磁石度7
139	く5	14	カクラン11	物形跡治坪(含鉄)		長6.9, 幅6.9, 厚2.0, 重163.7				メタル度社, 磁石度4
140	布2		P24	瓦片		縦2.52, 横2.53, 重2.79				空室遺構, 北穴跡, 1039年初跡
141	布3		カクラン9	瓦片		縦2.49, 横2.48, 重2.87				政和遺構, 北穴跡, 1111年初跡
142	布7		精査	瓦片		縦2.43, 横2.44, 重2.66				甕水遺構
143	布5		カクラン3	瓦片		縦2.41, 横2.41, 重3.4				甕水遺構
144	布4		表土・盛土	瓦片		縦2.28, 横2.27, 重2.05				甕水遺構
145	布8		精査	瓦片		縦2.34, 横2.33, 重2.55				二遺構
146	布0		精査	瓦片		縦2.27, 横2.26, 重1.76				
147	布6		A1・B1区包 含層	瓦片		縦2.53, 横2.54, 重5.69				2枚重現
148	布1		燻土	瓦片		縦1.91, 横1.9, 重2.4				1段アルム青銅鏡, 昭和19年発行
16			カクラン13	銅治坪(含鉄)		長7.6, 幅5.8, 厚3.1, 重162.3				メタル度社, 磁石度7
17			B2区 精査	銅治坪(含鉄)		長6.7, 幅5.7, 厚2.4, 重99.8				メタル度社, 磁石度6
18			A1区 北ビット部	銅治坪(含鉄)		長5.7, 幅4.3, 厚3.4, 重99.8				メタル度社, 磁石度5
19			A2区 精査	銅治坪(含鉄)		長6.6, 幅4.5, 厚2.8, 重80.8				メタル度社, 磁石度5
20			カクラン9	銅治坪(含鉄)		長6.9, 幅6.4, 厚2.6, 重79.5				メタル度社, 磁石度7
21			カクラン13	銅治坪(含鉄)		長6.4, 幅4.4, 厚1.9, 重63.0				メタル度社, 磁石度1
22			SK17	銅治坪(含鉄)		長6.3, 幅4.9, 厚1.8, 重61.4				メタル度社, 磁石度5
23			SK19	銅治坪(含鉄)		長5.1, 幅4.4, 厚1.6, 重56.4				メタル度社, 磁石度5
24			B2区 精査	銅治坪(含鉄)		長6.4, 幅3.9, 厚1.9, 重54.9				メタル度社, 磁石度6
25			SK17	銅治坪(含鉄)		長4.9, 幅4.1, 厚2.4, 重49.9				メタル度社, 磁石度4
26			B3区 EW アゼ包 含層	銅治坪(含鉄)		長6.5, 幅3.6, 厚2.7, 重47.5				メタル度社, 磁石度7
27			P9	銅治坪(含鉄)		長5.7, 幅4.3, 厚1.4, 重40.5				メタル度社, 磁石度7
28			A1区 北ビット部	銅治坪(含鉄)		長4.1, 幅3.4, 厚2.3, 重38.9				メタル度社, 磁石度9
29			B2区 精査	銅治坪(含鉄)		長4.5, 幅3.3, 厚2.8, 重36.5				メタル度社, 磁石度4
30			カクラン11	銅治坪(含鉄)		長4.2, 幅3.1, 厚2.6, 重29.6				メタル度社, 磁石度5
31			B3区 EW アゼ包 含層	銅治坪(含鉄)		長4.2, 幅3.7, 厚1.7, 重25.2				メタル度社, 磁石度5
32			A3区 包含層	銅治坪(含鉄)		長3.0, 幅2.1, 厚2.0, 重22.7				メタル度社, 磁石度4
33			カクラン9	銅治坪(含鉄)		長3.6, 幅2.7, 厚1.9, 重19.2				メタル度社, 磁石度5
34			P9	銅治坪(含鉄)		長3.3, 幅2.6, 厚1.8, 重15.6				メタル度社, 磁石度5
35			B2区 精査	銅治坪(含鉄)		長3.2, 幅2.6, 厚2.1, 重17.0				メタル度社, 磁石度5
36			SK23	銅治坪(含鉄)		長2.7, 幅2.7, 厚1.6, 重10.7				メタル度社, 磁石度4
37			B2区 精査	銅治坪(含鉄)		長3.5, 幅2.1, 厚0.9, 重9.5				メタル度社, 磁石度4
38			カクラン9	銅治坪(含鉄)		長2.4, 幅2.1, 厚1.6, 重6.2				メタル度社, 磁石度2

※「残/品」は断片、口縁部の残存率を示し、ほかの部分の割合はその都度付記

参考文献

- 上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁碗の分類』『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』
- 垣内光太郎 1990 『中世北陸の暖房文化』『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会
- 藤澤良祐 1991 『瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 出光美術館 1994 『越前古陶とその再現』平凡社
- 北陸中世土器研究会 1997 『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 北陸中世考古学研究会 1999 『中世北陸の石文化』第12回北陸中世考古学研究会資料集
- 水澤幸一 1999 『瓦器、その城館的なもの—北東日本の事例から—』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2004 『小松市幸町遺跡』
- 全国シンポジウム「中世産業の諸相」実行委員会 2005 『中世産業の諸相—生産技術の展開と編年—』発表要旨集・資料集
- 小松市教育委員会 2005 『幸町遺跡 I』
- 小松市教育委員会 2006 『幸町遺跡 II』
- 滝川重徳 2007 『北陸の瓦質土器』『瓦質土器の出現と定着』第26回中世土器研究会 日本中世土器研究会
- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
- 小松市教育委員会 2014 『大川遺跡』
- 小松市教育委員会 2015 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』
- (公財)石川県埋蔵文化財センター 2019 『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相—城下町とその周辺遺跡の土師器Ⅲ(かわらけ)を中心に—』平成30年度 環日本海文化交流史調査研究集会



調査区西側完掘状況 (南から)



P4 土層状況 (南から)



P6 土層状況 (南から)



SX03,SK04 検出状況 (北から)



SK04A 土層断面 (西から)



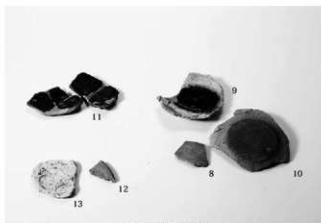
SD01 土層断面 (南から)



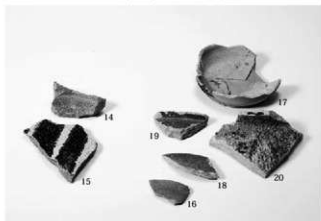
調査区北側断面 (南から)



SK02,SK03,SK04 出土遺物



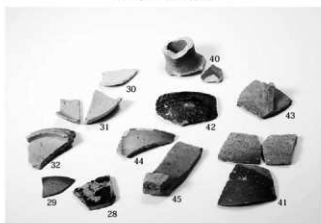
P4,P5,P6 出土遺物



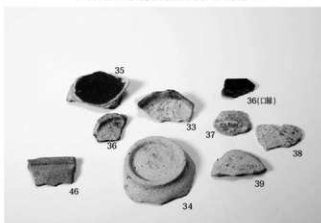
SX02,SX03 出土遺物



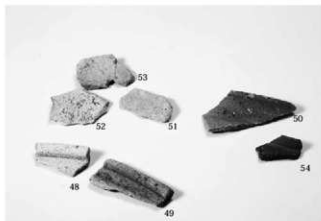
落ち込み周辺、調査区東側出土遺物



北区東側出土遺物 (須恵器)



北区東側出土遺物 (土師器)

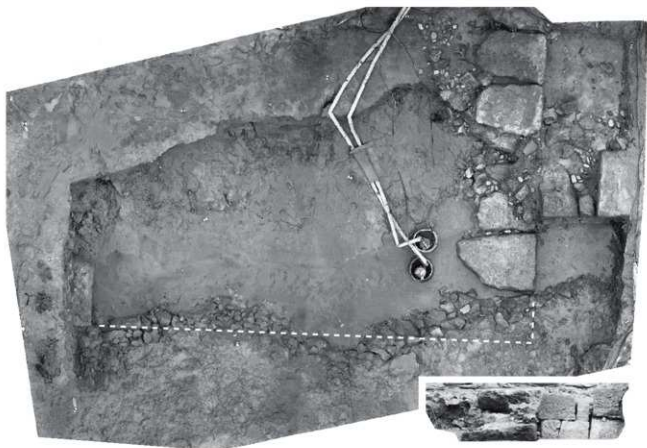


北区出土遺物



砥石

錘



造成土の掘取りと搬出状況



栗石検出作業



石垣掘り出し作業



石垣と栗石の完掘状況



A2-B2区 完掘状況 (南から)



A3-B3区 完掘状況 (南から)



A1-B1区 完掘状況 (南から)



遺構検出作業状況



SK13 完掘状況



SK17 完掘状況



SK18 礎石検出状況



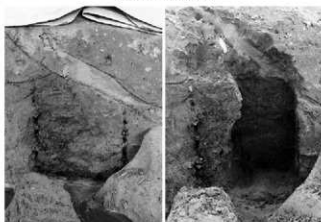
SK21 遺物出土状況



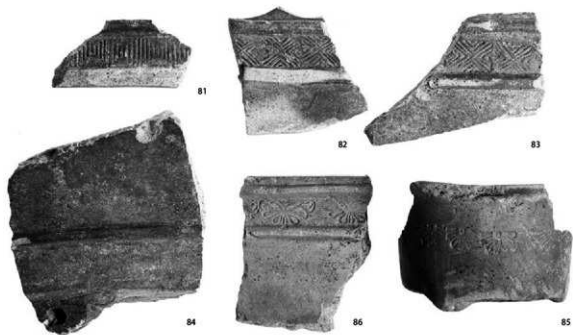
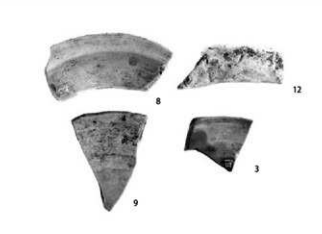
SK24 集石検出状況

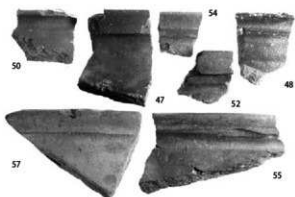
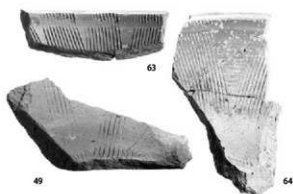
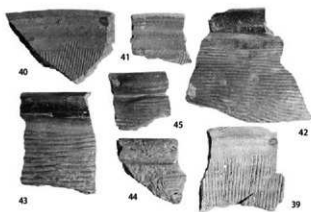
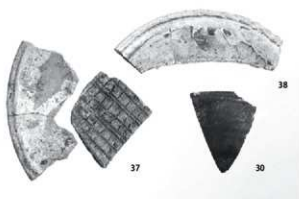
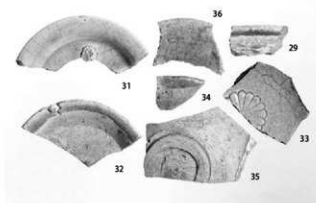
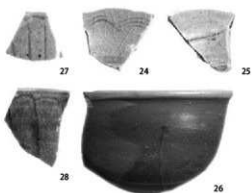


P-90 板石検出状況



板組遺構 (左: 検出状況、右: 覆土掘削状況)







石製品集合

撮影：田邊肇宏

報告書抄録

ふりがな	こまつしなにいせきはくつちようさほうこくしょ 16
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XVI
副書名	古府しのまち遺跡・小松城跡・本折城跡
巻次	
編・著者名	下濱 貴子・宮田 明・横幕 真
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒 923-0075 石川県小松市原町ト 77 番地 8 TEL (0761) 47-5713
発行年月日	西暦 2021 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古府しのまち 遺跡	石川県小松市 古府町	17203	305400	36° 24' 42"	136° 29' 53"	2016.11.28～ 2017.01.09	125	個人住宅
小松城跡	石川県小松市 丸内町	17203	300800	36° 24' 46"	136° 26' 33"	2017.12.04～ 2017.12.22	70	個人住宅
本折城跡	石川県小松市 上本折町	17203	309700	36° 23' 43"	136° 26' 54"	2018.04.10～ 2018.04.30	115	個人住宅

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古府しのまち	集 落	古 代	土坑、柱穴	須恵器、土師器、陶(土) 錘、砥石	
要 約 遺跡としては、梯川流域にみられる弥生から古代、中世にかけての複合遺跡。					

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小松城	城 館	近 世	石垣、堀		中土居の調査
要 約 絵図からある程度の精度で縄張りを地図上に再現できるが、ディテールの修正は必要。					

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本折城	城 館	中 世	土坑、柱穴(礎石)、板組	須恵器、土師器、陶磁器、妬器、瓦質土器、石製品、鉄製品、鍛冶関連遺物、銭貨	その他、弥生土器、近世以降の遺物
要 約 中世城館に関する遺構は検出されなかったが、中世とそれ以降の遺物が多数出土。					

小松市内遺跡発掘調査報告書 XVI

古府しのまち遺跡・小松城跡・本折城跡

令和3年3月31日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77- 8 TEL (0761) 47-5713

印 刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031
